

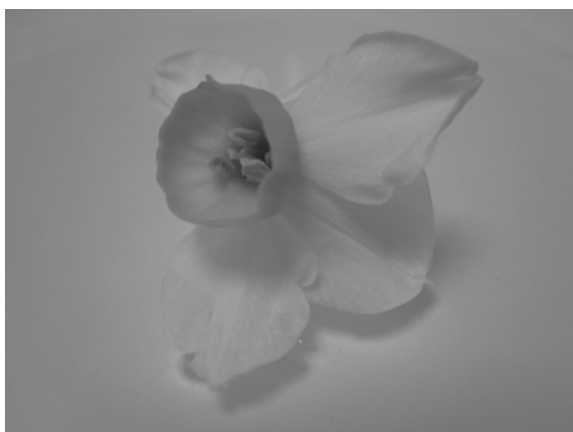
**長田穂波の聖<sup>1)</sup>**

—消えゆくものども—

阿部 安成

**I**

長田穂波の化生——これが〈癩=ハンセン病〉をめぐるこのところのわた

しの研究主題であり、いくつかの機会にこれにかかわる史料と論点を提示してきた<sup>2)</sup>。ここにいう「化生」とは、生物の分化した細胞が質の異なるべつの分化をおこなうという現象をあらわす語の転用で、英語でいえば、**transformation**となる。穂波は香

川県大島の療養所に生き、そこでの生をと

おして膨大な文字を書きつづけ、みずからの日常と信仰と、そして自己と世界とのあらし方を思索し、その痕跡を残し、**1945年12月18日**に大島で歿した。

穂波は、亡くなる数日まえの**12月9日**におこなわれた追悼礼拝で講演をおこない、その一部が遺稿として残っていた。おそらくその前後には脱稿していたであろう穂波の絶筆となった「松籟海鼓 新日本建設と青松園の巻」(『青松』第**15号**、**1945年12月**)は、**8000**字をこえる長大な、また重厚な論文となった。この論文執筆をめぐる、「入院直前の最後になつた原稿(新日本建設と青松園)など、あの健康で無理だつたと思ふと済まん気持で

<sup>1)</sup> 本稿は**2009**年度財団法人福武学術文化振興財団瀬戸内海文化研究・活動支援助成による研究題目「瀬戸内海域のハンセン病療養所における情報集積と交流」の成果の**1**つであり、別稿「長田穂波遺稿—死んだ穂波が遺したものは」(滋賀大学経済学部Working Paper Series No.129、**2010年4月**)と「死んだ穂波の横顔に—長田穂波探索」(同前No.130、**2010年4月**)と組みになる。

<sup>2)</sup> 前掲阿部「長田穂波遺稿」「死んだ穂波の横顔に」と、阿部安成「癩と時局と書きものを—香川県大島の療養所での**1940**年代を軸とする」(黒川みどり編『越境するマイノリティ』仮題、解放出版社、**2010**年刊行予定)を参照。

一杯です」とのちにふりかえられている<sup>3)</sup>。穂波追悼号となった『青松』第17号に掲載された「経過報告」には、穂波の入院は12月16日のことと記載されているから、これはそのまえの執筆となる。国立療養所大島青松園では、すでに、穂波が属したキリスト教信徒団体の霊交会の機関紙が廃刊となり（1940年）、園内の総合誌ともいべき『藻汐草』も休刊となっていた（1944年）。活版印刷の逐次刊行物が絶えたところで、大島では手書き手づくりの回覧誌として『青松』がつくられていた。

穂波は、自己の思索を表明する活字媒体がなくなってしまったから、戦時と敗戦と戦後を体験するなかで、さきの『青松』に論稿を寄稿していた。手書き版『青松』の制作創始から穂波の死までは、わずか1年あまりしかない。この短い時間を穂波は最大限に活用して、自己の文芸と信仰をつくりかえようとするとともに、彼自身も、まるで蟬が殻から抜け出て蟬でありながらもその姿を大きくかえたように、個体をなりたたせているその細胞や組織がべつな質へと化生したごとく、穂波は変容した、という論点をさきにわたしは示した。そこでの主題はキリスト教信仰と祖国日本への愛国心だった。

この小文では、穂波の信心と祖国にむける心情について、それにかかわる、いまでは閲覧の機会がかぎられた史料を提示して、いくつかの考察を試みることにした。

## II

ここでは1冊の文献をとおして、〈癩=ハンセン病〉がいまどのようにあら



わされているかを確認しよう。それは、穂波の忘失という歴史とかかわるからである。さきにみたわたしの、穂波の化生という議論では、1945年に発せられた穂波の精神は、その後、大島で忘れられ、島外では穂波そのひとが人びとの記憶から消えていったと述べた。穂波が歴大の文章を書いたにもか

<sup>3)</sup> 1945年12月23日におこなわれた追悼座談会での『青松』の編集を多く担った土谷勉の発言（「故長田大人を語る座談会」『青松』第17号、1946年1月）。

かわらず、である。

彼の死後、その遺稿集が編まれるまでに5年の年月を要したが（藤本正高編『福音と歓喜』長田穂波遺稿選集第1巻、聖約社、1950年）、その著作目録はただちにまとめられた。まず、穂波追悼号となった『青松』第17号（1946年1月）に掲載された石本俊市「追悼感話」に著書14冊の書名と発行年月があがり、それと単純な誤植をのぞけば同一の目録が、石本俊市を著者兼発行者とする『穂波追悼』（1946年3月。長島愛生園図書館蔵）に載った<sup>4)</sup>。そこには、1928年に刊行された『詩集 靈魂は羽ばたく』を始めとして、その後、1930年、1931年、1933年、1935年、1938年、1939年、1941年、1943年とほぼ年を次いで刊行された穂波の作品が記録されていた。そのうち、最初の著作は9版、『隨筆集 光れ輝け』（1931年）は20版にまでなったという。著作の数が14、そのうち最高で20版という著述と発行の量は、療養所のなかでも群を抜いている。1943年までの療養所において、これだけの著作を公刊した例はほかにないとおもう。1940年には、東京の北条民雄、九州の島田尺草、岡山の明石海人とならんで、「癩文学の四高峰」とも讃えられた穂波である（内田守人「癩の文学」『真理』1940年4月号）。そうした稀有な著述者であるにもかかわらず、穂波は社会から忘れられていったのである<sup>5)</sup>。

この忘失は、現在、文学を研究するものにおいてもみられる。「日本で初めてのライ者の詩集『いのちの芽』は、一九五三年四月十五日、京都にあった三一書房から刊行された」と記す著述がある。恵泉女学園大学教授（文学）で、群馬県にある国立療養所「栗生楽泉園慰安会発行「高原」誌の詩の選者、「詩と思想」編集長」もつとめるという森田進の『詩とハンセン病』（土曜美術社出版販売、2006年二刷、初版2003年）である。本書は、『ハンセン病文学全集』第6巻詩1（皓星社、2003年）に収録された大岡信の「解説」で、「今年（二〇〇三年）六月、大江満雄に師事したという森田進・恵泉女学園大学教授の新作『詩とハンセン病』（土曜美術社出版販売）が刊行された。この主題で出版された本は、私の知

<sup>4)</sup> ただしこの14冊のうち1冊は未見（『祈りの泉』修養団高知県联合会）。またこの目録にはない『伸び行く者』穂波叢書第2輯（交野愛汗塾、1935年）が刊行された可能性がある。したがって穂波が存命中に発行された著作は14冊ないし15冊となる。

<sup>5)</sup> 既存の穂波像をめぐっては、阿部安成「史料紹介 長田穂波の痕跡—療養所の生のあらわし方」（『ハンセン病市民学会年報2008』2009年）を参照。

る限りで初めてのものであると思われる。内容はきわめて新しい話題をも含んでおり、ひろく推賞するに価する優れた本である」と高く評価された研究書である。同書をとおして、いま〈癩=ハンセン病〉をめぐる事態がどのようにあらわされているのかを検証しよう。

同書で森田は、「〈ライ〉の、現在の正式な病名は〈ハンセン氏病〉である」と定める（同書所収の「魂の癒しという最大の主題－「ライ文学」初出 1995年）。このように病名が変わった動因に、「戦後、ライに対する差別と戦った結果、決定された」ことをあげ、しかし、「ライの詩人たちの多くは、今なおかれらの病名を〈ハンセン氏病〉となかなか言いたがらない。ことにかかれらの文学を「ハンセン氏病文学」とは言わない」と紹介し、その理由を、「一般社会の偏見と差別の中に封じ込められ、しかも国家政策によって隔離されてきた八十年以上の歴史の中で成立し積み重ねられた文学営為の重さが消失させられてしまうからである」とあげ、だから当事者にとってはいまなお、「ライ文学」なのだという。

同書ではこの稿のつぎにおかれた文章の論題が、「詩人・大江満雄とハンセン病－詩とライ」となっている（初出 1997年）<sup>6)</sup>。わざわざことわり書きが入れられ、「この論文で「ハンセン病」と書く場合は、医学、学問、法定用語であり、「癩」は、歴史的な資料や文献に出てきた用語である。そして、「ライ」とは、ハンセン病という医学、学問、法定用語によって、葬り去られてしまう日本の患者たちの過去の総量を、忘れまい忘れさせまいとする者たち（非ライ者も含む）の意志的な表現である」との説明が記されている。同書「「あとがき」に代えて」ではまた、「なお、この書、「癩、ライ、らい、ハンセン氏病、ハンセン病」と様々な表記があるが、文脈の中での表記であり、正しくはハンセン病である」とあらためて明示されている。

細かな指摘になるだろうか、「現在の正式な病名は〈ハンセン氏病〉である」「正しくはハンセン病である」というとき、「氏」の1文字のあつかいはどうなるのだろうか、また、ここにいう「正式な」「正しくは」とはどういうことなのだろうか。なににおいて「正式」であり、なににとっての「正し」さなのか。憶測すれば、この混乱は、「文脈の中での表記」

---

<sup>6)</sup> なお恵泉女学園短期大学『英文学科五十周年記念論集』掲載を初出とするこの文章は、『詩とハンセン病』収録にさいして45頁となり、そのうち15頁分以上が引用というめずらしい構成となっている。

などという適切な使い分けなのではなく、たんに既発表の文章を寄せ集めたときに生じたミスであり、考えがおよばなかったことのあらわれにほかならない。同書「「あとがき」に代えて」にはきちんと、「編集や校正の都合上、発行が遅れたことをお詫びする」との謝辞が記されていた。校正でも漏れたというわけだし、編集のうえでも「氏」には注意を払わなかったということだ。

そしてさきにみた「日本で初めてのライ者の詩集」の年次である。森田はそれをさきにあげた文章「詩人・大江満雄とハンセン病」に記した。さきわたしが引用した1文のあとに、8頁をこえる大江満雄の文章の転載がつづく。その文中に、「今日までに療養所から出た詩集「野の家族」「長島詩謡」「残照」「緑の岩礁」「癩者の魂」「小島に生きる」と記されている<sup>7)</sup>。大江はみずからが編集し解説も寄せた詩集『いのちの芽』の刊行以前にも、療養所から発信された、いいかえれば、癩者による詩集があることを知っていた。それを森田はどう読んだのだろうか。わたしは2008年に、穂波の著作目録をつくるにあたって、彼の最初の著書となった詩集『靈魂は羽ばたく』（光友社、1928年）が恵泉女学園大学図書館にあることをWebcat Plusで確認している。このデータベースでは、森田が勤務する大学の図書館でいつから『靈魂は羽ばたく』が所蔵されていたのかはわからないが、森田は自著の二刷を発行する2006年の時点でも穂波の詩集を知らなかったのか。あるいは、「日本で初めてのライ者の詩集」という表記自体に校正ミスによる誤りがあるのだろうか。

こうした歴史をたどる作業の杜撰さは、森田の「ライ文学」の時期区分にもあらわれている（「魂の癒しという最大の主題」）。森田はそれを3期にわけ、「暗黒と絶望の中からの衝撃的な発現」としての「戦前」、「国家意志との戦いの表現」である「戦後一九七〇年代頃まで」、「再生と復活の表現である」「それ〔1970年代ころなのだろう——引用者による。以下同〕以後」という。歴史の時期区分も過去の出来事の抽象化にほかならず、そこにはつねに例外が付きまとうともいえるが、森田による3期時期区分は、いくつも例外が指摘できるというていどではなく、発想そのものが誤っている。おそらくこの3期区分は、戦前を北条民雄で代表させ、広く一般に流布している1945年を区切りとする感覚によって

---

<sup>7)</sup> 『癩者の魂』は1950年、『小島に生きる』は1952年の発行。

戦前と戦後を分けたうえで、民主化した戦後の歴史を予防法に対する運動でとらえ、それ以後の代表者としてたとえば塔和子をおもいうかべるといった構成なのだろう<sup>8)</sup>。

ていねいに論じることをしないが、反証はいくらでもあげられる。たとえば、本稿に収録した長田穂波の作品「灯火を翳せる者」に「再生と復活の表現」をみることはできないのか（発表は1942年から1944年にかけて）。大竹章『無菌地帯』（草土文化、1996年）を「暗黒と絶望の中からの衝撃的な発現」とみることは誤りなのか。国家意志（国家意思？）との戦いは、その萌芽、あるいはその素朴で原初のようなすを香川県大島の霊交会機関紙『霊交』紙上にみることができる（もっともわたしと森田では「文学」の対象が異なるのだらう）。この時期区分には、自分でみつけた記録をもとに（なにも新発見ということにかぎられない）、それをみずからの経験と知識をふまえて読み、そして歴史の記し方を展望するという発想がまるでみられず、既存の時期区分になにかそれらしい事態を重ねあわせている粗末さしかない<sup>9)</sup>。こうした森田の議論を収録した『詩とハンセン病』は、「ひろく推賞するに価する優れた本」なのだろうか。

わたしは同書を評価しない。その理由は、たんに文集としてのつくりが粗雑だったり文学者には不慣れな歴史をあつかう手つきに不備が多かったりするというよりも、癩で

---

<sup>8)</sup> 『詩とハンセン病』所収の「ライ文学の現在—生とユーモア」で森田は「戦前の北条民雄が代表するライの悲惨さを訴える第一期、戦後のプロミン導入以来の、社会復帰と人権の獲得を旨とした戦いに核を置いた第二期、そして、現在、在園五十年を越え終末期を迎えた元患者らの、非ライ者には容易に届きえない根源的な生の意味を手にして、深く生きる生の豊かさをユーモアさえ混じえて描く第三期」とあらわしている（初出2002年）。なおわたしは療養所の外に生きるものが「終末期」の語を使う無神経さに腹が立つ。1941年生まれという森田は2010年の時点で69歳になるだろう。その年齢の自分にむけて「あなたももうあと10年、20年後にはいないだろうから、自身の終末期をみすえてこれまでの仕事をまとめたらどうか」などといわれたらどうするのだろうか？

<sup>9)</sup> 時期を区切ることへのいい加減さは、たとえば小鹿島慈恵医院について「興味深いのは、日本のどの国立ハンセン病療養所よりも創立が古いという事実である」と記すところにもあらわれている（『詩とハンセン病』所収「日韓「ハンセン病詩」管見」初出2003年）。その創立は1916年のこと、「ただし小鹿島慈恵医院は、当初道立であった」とも記す。①1916年の時点で小鹿島は日本だった（記すとすれば「内地のどの」だ）、②「当初道立」ということは国立ではなく、同院が朝鮮総督府直轄（これを国立というとする）となるのは1934年のこと、③国立療養所長島愛生園は1930年開園、④1942年に厚生省に移管となる（これで国立となる）たとえば香川県大島の療養所が公立として設置されたのは1909年のこと（ほかに4療養所設置）、では小鹿島慈恵医院はどういう点で「日本のどの国立ハンセン病療養所よりも創立が古いという事実」を指摘できるのだろうか？

あれハンセン病であれ、それを生きた人びとの生をあらわすその根本の向きあい方に不信があるからである。第1に、療養所での文学や文芸をなぜとりあげるのか、どのようにみるのか、第2に、それにどのように意義や機能を認めるのか、第3に、それらをどのようにあらわすのか、といういずれも重なりあう論点ではあれ、以下にこれらにおいてみましょう。

1979年を初出とする「塔和子の世界」をのぞいてもっとも古い文章の「魂の癒しという最大の主題」には、森田の観点が示されている。日本現代詩を考察するとき、「少数派の詩の側」からそれをみる、とみずからの位置を定める。彼にとってそれが「病者（身体障害者も含んで）」の詩であり、「とくに「ライ文学」なのだという。なぜか。「かれらは、健常者の思い及ばない深い次元をしばしば切り裂いて生きているがゆえに、その痛みの底から驚くべき表現力を獲得していく」から。その例として、「香川の塔和子」など4名が「すぐれた詩人たち」としてあげられている。ただし、こうした「少数派の詩をひとつの概念にまとめあげれば」それで済むのではなく、「障害者の詩であれ、ライ者の詩であれ、現代詩としてすぐれているか否かが重要なのであるが、と同時に、少数派としての独自の存在意義と文学史への貢献を持ち得ている」という「私たちが見据えて来なかった」この「事実」が重要なのだという。

癩者の詩には「健常者」が持ちえない表現力があり、よって、「文学史」に一領域を構成する貢献があり、したがって、すぐれている、というわけだ。ここに森田の難点が明瞭にあらわれている。癩者 - その表現力と、「健常者」 - その表現力とのあいだに、劃然とした相違をおいてしまうこと、「すぐれた」という評価を持ち込むこと、そして、その帰結として表現力においてすぐれていない癩者を想定してしまうこと、あるいは、詩をつくらない癩者を無視してしまうこと、である。森田は同書のべつな箇所、「ハンセン病者の芸術表現は多岐に互っているが、書画、園芸、手工芸、陶芸、彫刻、音楽、文学などに優れている」（「日韓「ハンセン病詩」管見」）とも、また、「非ライ者には容易に届きえない根源的な生の意味を手にし」た（「ライ文学の現在」）とも記している。

療養所にいけば、現在も過去においても、そうした書や絵画、陶芸や詩歌、写真、カラ

オケなどのさまざまな表現があること、ときにそれが活発であることはすぐにわかる。だが同時に、写真を撮るのは上手だがカラオケをまったくしないひと、カラオケは好きだけれど音程もリズムもはずれて歌ってしまうひとがいることも、あたりまえのこととして、すぐにわかる。ついで、そう書いたところですぐに、上手な写真とはどれなのか、カラオケのリズムについてゆけない歌は上手なのか下手なのか、「すぐれた」とはだれが、どういう基準で評価するのか、という問題があるとわかるはずである。さらに、療養所には、書画にも園芸にも手工芸にも陶芸にも彫刻にも音楽にも文学にもかかわらないひとたちがいることもわかる。園内を自転車で疾走することを楽しむひと、野菜づくりに汗を流すひと（これは園芸か?）、もっぱら酒を飲むことを好むひと、そうした人びとは「芸術表現」を営んでいると森田はみるのだろうか（なおここでわたしは療養所のなかの表現は評価に値しないといたいのではない）。

もとよりわたしたちは、残されたり残ったりした記録という史料をもとに過去を考察するよりほかに、認識において制限のある行為をおこなっている。そして森田の主題は「詩とハンセン病」なのだから、療養者たちがつくった詩をもとに考察をすすめてゆくよりほかない。また、療養所のなかの生が、そこにいるものたちが「社会」とよぶ外部とは異なることも当然で、それは療養所にゆかずともあるていどは想像することができよう。そうみわたしたうえでやはり、癩者と「健常者」を峻別し、さらに生において隔てられた癩者の営みから「芸術表現」を代表させて、それを「すぐれた」と評価する森田の観点からは、「健常者」なみの表現しかできない癩者、「芸術表現」をおこなわない癩者は、消えてしまうのではないだろうか。「彼には癩文学などはなく、ただ一つ「文学」があるだけだったのだ」（光岡良二「北条民雄の人と生活」1938年）<sup>10)</sup>と評された北条民雄や、「文芸を為す心には癩園をとどめざれ！！」（長田穂波「松籟海鼓」『青松』第14号、1945年11月）と記した穂波を、森田はどう読むのだろうか。ここには名称にとどまらない、療養所のなかから、在園者たちは、なにを発信するのか、の問いがあるはずである。

---

10) 北条民雄『いのちの初夜』（角川書店、文庫版、2001年改版42版、初版1928年）所収。



森田のいう「すぐれた」作品には、どのような意義や機能があるのか。すでにみたとおり、1つには、「文学史への貢献」があり、2つに、彼の文章の表題にもあるとおり「魂の癒し」があり、3つに、森田による大江論のなかにあらわれた、「自分の非運を相対化すること」である。森田は「ライ文学」の「最大の主題」を「死からの再生そして魂の癒し」という。この「癒し」というかなり流布している語は、とても便利な名詞連用形である<sup>11)</sup>。目と耳に心地よさそうだし、なにより、なにかわかった気になったりさせたりする効能がこの言葉にはある。だが、あらためていうと、「魂の癒し」とはなにか。なにがどのようになつたようすをあらわすのか。たんに、和む、ということなのか、魂の傷を治し、魂が抱えた負荷を解消するというのだとしたら、それは魂のどのようなようすを、詩がどのようににしたというのか、この魂とはいったいだれの持ちものなのか——森田がしばしば記す「根源的」「根元的」の語とならんで<sup>12)</sup>、わたしにはうまく理解できなかった。

だが、大江満雄をとおして森田のいう「自分の非運を相対化すること」との表現を参照すると、癩者以外のものの「魂の癒し」がなになのかわかるような気がする（「詩人・大江満雄とハンセン病」）。森田は、この大江論をとおして、「このささやかな論文で追い求めたいことは、政治的、医学的、歴史的なハンセン病の追求ではない。ではなくて、詩とライとの関わりである。それはどこかで〈癒し〉と結びつくかもしれない。自覚的な芸術療法ではなくて、漠然とした言い方をすれば、ライ者の人間性の回復を目指す癒しの詩の追求である」という。曖昧な漠然とした表現から付度すると、癩者にとって「魂の癒し」とは、「人間性の回復」となる。森田はその詩がどう読まれるのか論じるつもりはないのかもしれないが、大江論のなかでつぎのとおり森田は記している——「戦後の窮乏生活の中で、闘病を強いられて苦しんでいたが、ライについて知り、ライ者の詩に触れることによって、自分の非運を相対化することを知ったのだ、[大江が森田に、だろ]と語ってくれた」という。

11) 『広辞苑』第6版をみて少し驚いた。「癒し」の語が掲載されていないのだ。「癒す」「癒し系」はあるが、「いやし」とは「卑し」「賤し」と表記されている。

12) 前掲「「あとがき」に代えて」で森田は「この章〔Iのこと〕で、詩（文学）とハンセン病というテーマが成立する根元的理由がお分かりいただけるであろう」というが、引用だらけの文章からはそれがわからなかった。

「非運」とは、不幸せであり不運を指す。「健常者の思い及ばない深い次元をしばしば切り裂いて生きている」癩者たちは、「その痛みの底から驚くべき表現を獲得して」「すぐれた」詩をつくりだしてゆき、それは当人たちの「人間性を回復」する手立てとなり、それとともにその詩を読むものたちにとっては、自分の不幸せを噛み締めなくてはならないとき、その苦痛を和らげる不幸があると知ることとなる、と森田の「魂の癒し」という議論はなってしまうのである。

こうして「ライ文学」、癩者による詩は、森田によって、「人間の根源的な闇と光の内部世界とまっ正面からつきあいつづけてきた」と総括される。闇と光という二分法による認識は、一方に、自己に責のない罹病とそうした身体の隔離を国家が法によって遂行してしまっただけという非運があり、他方で、そうした隔離下での人間性の回復が目指され、遂げられる幸いがある、といいかえることができよう。結論や論点のまとめが非凡だから、森田の議論は不可だというのではない。癩者による詩の一連をも読まなくても、闇と光という対比による表現はできるし、癩者の詩はこうした総括にしか到らない、それほどに貧しい世界しかあらわしていないのかとおもうのである。闇と光という総括ならば、『風立ちぬ』や『蟹工船』や『病床六尺』、『漂流教室』や『ドラゴンヘッド』を読んでも記されうる感想ではないか。

癩、ハンセン病をめぐる研究で、狭義の歴史研究（たとえば藤野豊）、医療史あるいは医学史研究（たとえば山本俊一『日本らい史』東京大学出版会、1993年）、病人史研究（たとえば川上武『現代日本病人史』勁草書房、1982年）において療養所内で創作された文学や文芸が、ほとんど軽視ないし無視されてきたことは確かだし、他方で、川端康成や内田守人（守）たち以外にどれほどのものが、「文学」のもとで療養所における創作を議論してきたかを問えば、そのいわば原初における不備は指弾されなくてはならない<sup>13)</sup>。そのう

---

13) したがって 2002年に始まった『ハンセン病文学全集』（皓星社）の刊行はいくつかの不備があるとはいえ高く評価されるべき事業である。他方で「今、日本にけるハンセン病患者の隔離の歴史は、こうした当事者の研究〔各療養所で刊行された自治会史を指す〕を基盤として、そのうえに新たな研究が幾重にも重ねられ、その通史はほぼ明らかになった。なぜ、強制隔離がなされたのか、〔中略〕なぜ、戦後も強制隔離が続けられ、ハンセン病患者の基本的な人権は無視され続けたのか、こうしたさまざまな「なぜ」については、ほぼ解

えて療養所での生をあらわす作業をつぎにすすめるためには、療養所に残る記録を総点検しようとしつつ、あらためてその生の問い方を、あらわし方を手探らなくてはならないのである。

「詩とハンセン病」という課題を論じようとするとき、よく知られた、小説や随筆を残した北条民雄よりも、歌集を上梓した明石海人よりも、そのまえに詩集を公刊していた長田穂波に言及しなくてもよい、あるいは知らなくともかまわないとする文集が森田によって編まれた。その作業とはちがって、穂波の詩を素材として論を立てようとするならば、彼の詩作以外の活動や、彼が生きた大島の療養所のようすをも視野に入れる必要がある。そこでは、『詩とハンセン病』とはどのように異なる論点を示せるのだろうか。

### III

『詩とハンセン病』で森田は、「塔和子の世界」と「栗生楽泉園の詩人たち



の章で、療養所在園者たちの詩を論じている。そこでは、それぞれの詩人が個として生存しているものとのみあらわされている。療養所での「病友」とのつながりについて、ほとんど言及がない。森田の議論では、療養者がたったひとりで詩作をおこなっているかのようなのだ。

たとえば、塔和子の詩をめぐって、「こうして創造神への問いと疑問が生まれる」「キリスト教的ではあっても正統神学によらずに、詩人としての長い歩みの中から独自に復活の救済観念へと漕ぎつこうとしている」「塔和子は、キリスト教を媒介して、日本の自然を見つめつづけ、そこから東洋人らしい木の聖化にまで到ったのだといえる」といった表現がある（ところで「東洋人らしい木の聖化」とはいったい何国人、何民族に当てはまるのだろうか、どの地域に住む人びとに適応できる表現なのだろうか。わたしのこのものいいは、

---

明されたと言ってよいだろう」（藤野豊『戦争とハンセン病』吉川弘文館、2010年）という発言は、研究者としての不遜の表明であり、療養所や隔離政策のもとにおける癩者の生への冒瀆だと強くおもう。

「東洋人らしい」といういい加減な集合態の想定についてむけている)。

森田は塔和子が、大島の療養所で1914年に結成されたキリスト教信徒団体の霊交会が発行した『霊交会 創立五十周年記念誌』(1964年)に編集委員として名をつらねていることを知っているのだろうか。彼女はそこに詩もよせている。塔の詩を論じるときに、そうした情報は不要ということなのだろうか、キリスト教信徒との交流は無関係か。

あるいは、栗生楽泉園で過ごした人びとの詩を論じるにあたって、「他者への開かれたみずみずしい感性であり、他者の幸せを心から望むやさしさである」「アフリカの子どもへの、クルド人への、苦しむ人々への深い思いやりと励ましが生まれる」との表現が用いられたり、「長い間自治会長を務めた」「自治会副会長の重責を荷っている」「韓国人」「紛れもない白系ロシア人」「詩話会の長老ともいべき人」の作品をとりあげたりしている。だが、そうした感性や意思を持つひとたちや、それぞれに園内で役職を担ったり、出自を持っていたり、グループ活動をしたりするひとたちの詩をめぐる議論に、彼ら彼女たちがどのようなひととの結びつきを生きてきたのか、それが詩作にあらわれているのか、詩をつくることで彼ら彼女たちが療養所のなかでなにになっただのか、といった観点はほとんどあらわれてこない。作者たちが詩をつくる個としてのみ、森田の議論のなかに登場しているとみえるのだ。もちろんそれをたどるための、考察するための記録の有無がもたらした議論かもしれない。それならば、そうした記録の欠如をふまえた議論を展開すればよいとおもっただが、そうした気配はみえない。詩をつくる個がいて、そのものがつくった詩集があれば(とりあげた詩集の多くは森田が「編集を引き受けて、校正から出版まで携わったので、ひととき愛着が深い」と「あとがき」に代えて)にいう)、解説というよりは、一人一人への讚美歌であり、詩人論<sup>14)</sup>は記せるとみえてしまう<sup>14)</sup>。

大島の療養所では、穂波をはじめとする人びとを、その園内外での交流をふまえてあらわすことができるみとおしがある。こうしたフィールドを持つわたしの研究課題は、詩や

---

14) なお森田がくりかえし用いる「聖書を紐解くと」などといった用字法はまちがいではないか。『広辞苑』では「紐解く」は「下紐を解く」「つぼみが開く。ほころびる」のこととなっていて、「一般に、書物をひらいて読む」は「繙く」なのだが、詩や文学の世界には独特の用字法があるのか、わたしは知らない。ただしおなじ岩波書店が発行する『国語辞典』第5版では「紐解く」「繙く」におなじ意味をあたえている。

文学にとどまるのではなく、療養所に生きた人びとの生と、そのあらし方の考察である。もとよりわたしは、彼我的研究スタイルの是非や優劣を問いたいのではない。自己の作業の方法やその大枠としての学のあり方や、対象を考えるための素材(史料)のありようと、みずから書く歴史の構成について自覚があるかどうか、その才覚を確認したいのである。たんに自己の運や才を相対化するために、療養所の生を活用するのではなく、残された、残ってきた記録(史料)のできるかぎりの総<sup>そうざら</sup>浚えをしながら、それをもとに過去をひとまず再構成するための学と、それにかかわるわたしみずからを再考する手立てとして、療養所の生を横領するという構えである<sup>15)</sup>。

森田のおこなう「ライ文学」研究では、「癩詩人」と讃えられた穂波は消されてしまうし<sup>16)</sup>、藤野の療養所自治論には、大島の療養所での穂波たちによる文芸や芝居、信仰と修養の議論が消えている<sup>17)</sup>。消えゆくものども、消されてしまうものたちの再生は、歴史学研究のあたりまえの作業である。

## IV

穂波の活版印刷による逐次刊行物に掲載された最後の作品は、『清流』誌



上の「灯火を翳せる者」となった(1942年～1944年)。彼の絶筆となった遺作は、さきに示したとおり、手書き手づくりの『青松』第15号(1945年12月)に掲載された「松籟海鼓 新日本建設と青松園の巻」である(『青松』第15号掲載の版、同誌第17号掲載の抄録版、『楓の蔭』第176号掲載

<sup>15)</sup> わたしは前掲「癩と時局と書きものを」で藤野の議論を「歴史の横領」と述べた。それは歴史学研究を「国家とのたたかいの場」(『忘れられた地域史を歩く—近現代日本における差別の諸相』大月書店、2006年)とだけおく彼の立場から切り落とされてしまう過去の多さを指摘した批判だった。横領の有無や是非ではなく、どういう横領かを問うている。

<sup>16)</sup> 石本俊市「追悼感話」(『青松』第17号、1946年1月)での穂波への讃辞。

<sup>17)</sup> 阿部安成「史料紹介 療養所における「自治」論の始線と史料の現在—大島青松園をフィールドとして」(『隔離の百年から共生の明日へ—ハンセン病市民学会年報2009』2010年)を参照。

の分割後編の3つの版を、前掲阿部「長田穂波遺稿」に全文収録した)。おそらくこの論文の脱稿とそう時期を隔てない12月9日の礼拝での穂波の講演は、その原稿が遺稿としてあり、それが『楓の蔭』第177号(1946年6月1日)に掲載され(前掲阿部「長田穂波遺稿」に全文収録)、さらにそれよりあとの12月25日におこなわれることとなっていたクリスマス祝会にむけて、穂波は感話の原稿をつくっていて、それが遺稿として、前掲石本『穂波追悼』に掲載された。本稿には、「灯火を翳せる者」と<sup>18)</sup>、クリスマス祝会感話原稿「大なる暗示」の全文を掲載した。

『清流』の編集と発行を担った内田正規もキリスト者であり、クリスマス祝会の感話も穂波の信仰の場での発信である。どちらも穂波が「聖人」や「聖者」と讃えられるにふさわしい、その痕跡としてまずは読まれることだろう。

『清流』に掲載された「灯火を翳せる者」をめぐるようすをみよう。この作品は、前掲石本『穂波追悼』に掲載された矢内原忠雄の「弔文」でふれられている。その全文を引用しよう。

君の畢生の大作は「灯火を翳せる者」と題する長篇の詩であつて、君はその全部を完結し之を故内田正規君に託し、内田君はその初めの部分を清流誌に連載したが、同誌廃刊と共に中絶した。内田君は病篤き時この原稿のことを心配し私にも出版の相談があつたが、非力非愛にしてそれを引受けることが出来なかつた事を両君に対して深く恥ぢる。他日出版の事がもつとらくになれば何らかの方法によつて長田君の勝れたこの遺作を世に現したいと考へてゐる。

『清流』に2年にわたつて連載され、連載分だけで3万字におよぶ長編詩「灯火を翳せる者」の連載中断の次第と、矢内原と穂波と内田との交流を報せる一文である。

この矢内原の文章は、おそらく、矢内原が編集発行した逐次刊行物『嘉信』第9巻第1号(1946年1月)に掲載された「長田穂波」の題がついた追悼文の抄録だろう。およそ

---

<sup>18)</sup> この「灯火を翳せる者」収録にあたって文字入力のおほとんどにおいて滋賀大学経済経営研究所の研究サポートを得た。

1/6 ほどに短縮されている<sup>19)</sup>。矢内原は自己が主宰する逐次刊行物誌上で、穂波が歿したその翌月の号に追悼を披瀝したのだから、まをおかずに彼の死に応じたこととなる。ただし、石本はその弔文を転載するにあたって、大幅に縮めてしまい、『清流』連載の遺作にふれた箇所だけとしてしまった。石本自身も『穂波追悼』の「後記」でこの遺作に言及している。ただし、全編脱稿しながら連載中断となった「灯火を翳せる者」も絶筆「松籟海鼓 新日本建設と青松園の巻」も、石本と矢内原がそれぞれに、いつの日か全集または選集に載せたい、出版したいと期しながらも、それらの願いはかなえられなかったのである。その後の矢内原にとって、穂波がどのようになっていったのかは、わからない。石本による活版印刷の『穂波追悼』は、おそらく 11 頁立てがようやくだったろうから、どちらも長編の遺作をそれに掲載することには、無理があったのだろう。「松籟海鼓 新日本建設と青松園の巻」は抄録版が、手書き手づくりの『青松』と手書きガリ版刷りの『楓の蔭』に掲載され、後者において手づくり回覧誌よりはいくらか広い範囲に流通しただろうし、べつに記したとおり、『清流』掲載の「灯火を翳せる者」は、正確には第 5 章までが、2010 年 2 月になってようやくみられるようになったのである<sup>20)</sup>。

文学を論じるときに、活版印刷による詩集をだけ対象とするのであれば、この穂波の長編詩は、文学論や文学史からは消されてしまうだろう。いや、実際に消えているのだ。これが発表された 1942 年から 1944 年にかけては、出版の困難な時期であり、掲載誌『清流』自体も刊行継続が不可となったのだから、全体で 400 字づめ原稿用紙にして 100 枚から 200 枚の分量となったであろうこの長編詩を 1 冊の図書として上梓するのは、もとよりむつかしかっただろう。「詩とハンセン病」を主題とする研究においても、まるで顧みられることがなかったのだ。

---

19) この『嘉信』掲載版の全文は阿部安成、石居人也「無教会と愛汗—大島青松園キリスト教霊交会の 2 つの精神」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.121、2009 年 12 月)を参照。また矢内原忠雄『矢内原忠雄全集』第 25 巻(岩波書店、1965 年)にも収録されている。『嘉信』誌上の内田と穂波についての情報は、阿部安成「大島の生、島をめぐるレターズ—香川県大島の療養所を場とした知の動態」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.109、2009 年 4 月)を参照。

20) 『清流』の霊交会所蔵分やそれらの書誌情報は前掲阿部「死んだ穂波の横顔に」を参照。

べつに記した内容をくりかえすと、「灯火を翳せる者」が初めて掲載された『清流』第9号（1942年11月）の「河畔雑記」欄には、「○本号から長田穂波兄の畢生の大作が連載されます。内容から言へば三界遍歴のダンテ神曲を想はすもの、我国では藤井武先生の「羔の婚姻」以外にかゝる類のものを知りません。本号のは第一章の前半、約十章の予定／本誌もこれで基督教文学の使命にも副ふ事が出来ると喜んでゐます、この原稿はペンを手にくゝりつけての執筆であり、既に一年に亙る構想によるもの」と、おそらく内田による説明がつけられていた。つぎの第10号（1942年12月）の同欄には、「○「盲に聴く」も実にいゝ。淡々たる筆致で読者を微笑させながら、深いものが書かれてゐる。この人や、長田兄、玉木姉、花見姉など、あの重い軛を負ひながら、この様に明るい力強いものが書かれる処が信仰であらう」と、長編詩への感心が記される。そして、1944年1月発行の第17号に挟み込まれた手書きガリ版刷りの「社告」において、「未完原稿」への謝辞が述べられたうえで終刊となつてしまい、穂波の連載も途絶したのだった。

「河畔雑記」では、「灯火を翳せる者」は療養所での文芸や癡文学ではなく、キリスト教文学ととらえられている。そこであげられた藤井の著作は、矢内原忠雄編『藤井武全集』第1・2巻羔の婚姻（藤井武全集刊行会、1939年再版、初版1931年）として霊交会教会堂図書室にあった。「三界遍歴のダンテ神曲を想はす」という内容紹介は、「河畔雑記」子独自の感想ではなく、穂波がその本文に記した、ダンテ、ミルトン、の記述をふまえてのものだろう。

この「灯火を翳せる者」では、キリスト教への信仰をふまえて示された世界観のなかに、ときおり現世の現時のようすが組み込まれることがある（以下引用にあたって改行記号や原文にあった記号は省略したばあいがある）。それは、世界を大きく善と悪とに二分する戦いであり、自己の身体であり、隔離という国是である。穂波にとって、あるいは多くの療養者たちにとって、現在の自己の身体をまるごとつくりかえる、あるいは生れかわることが深く強い願望であり、それが「新生」という言葉をとおしてあらわされる。戦時であるからには、「汝、我が愛する祖国日本の理想を視しや、八紘為宇、正義の剣は犠牲に振ひ、仁愛の政事は諸民族を興す、日の丸の旗風、これ神の、理想に動かんとするにあらずや」



と、信心も時局に呼応してあらわされる。神への信仰と、天皇あるいは皇室への崇敬とは、相容れない精神ではない——「更に追撃する、汝は輩下をもて叫ばしむる、即ち、破壊は建設の母、戦争はヨリ高き文明の父、思ひのまゝに本能の翼を伸し、慾に向つて勇敢なれ……と！、されど我が祖国の魂は、自己を忘れ奉公の念に燃え、神をおそれて人を愛す、凡ての美德は、皇室中心忠孝一本に発するに非ずや」——滅私奉公、忠孝、報国、聖戦完遂が叫ばれるこの時局において、「我は、神の子なり、我は、日本男子なり」と自覚する療養者たちはどのように身を処せばよいのか。「汝、祖国愛を唱ふるも、出征に増産に何をか為し得る？」と自問せざるをえないとき、「無為徒食の結構論者に榮あれ」といくぶんかの自棄、あるいは無為徒食を是とする開き直りしかないともいえるのである。

みずからの心身を持て余し、自己に倦む穂波のようすは、1930年代末にもうかがえた。他方で、隔離下の療養所での生活を受忍して、「散菌行為」をしないことこそ「愛国行為」となるのだ（『靈交』第264号、1940年）、と隔離と愛国とをとらえかえすように穂波はなつてゆく。穂波のこの時局と自己と現世の把握は、「愛する同胞一億を思ひて、噫、我れ地獄に落つるともよし」と「灯火を翳せる者」(3) (1943年)に記した、彼なりの滅私奉公観につうじるだろう。つづく連載の次々回で穂波は、「視よ善き名の下にて、如何に多くの醜き、罪悪が活歩しつゝあるかを！、愛する祖国よ反省せよ」とうったえもする（「灯火を翳せる者」(5)、1943年）。ここで祖国に反省を迫る文章の文脈をつかみにくいのだが、秩序混沌とするその責を祖国にもとめているように読める。

「灯火を翳せる者」の2年にわたる連載をとおして穂波は、ダンテやミルトン、ニーチェに、唯物主義にも言及しながら、神の国と祖国日本とを並存させながら、癩者として戦時を生きる方途を模索していたようにみえる。ただ、その暗中之手探りも身悶えするほどの苦悩とはなっていないようだ。それは、穂波がここでは信仰に生き、ただの<sup>ライト</sup>光ではなく<sup>トーチ</sup>灯火がかざされる世を展望していたからではないだろうか。

すっかり準備を整え、おそらく楽しみにしていたであろうクリスマス祝会で、穂波はなにを話そうとしたのだろうか。靈交会会員だけでなく日曜学校の生徒も集う祝会となれば、信仰心のない子どもたちも、クリスマスであり日曜学校ということであつまってきただろ

う。ここでホナミは、「如何なる場合にも神を義とする事こそ、真実に神を知る者の信仰態度」だと説く。信仰心のある人びとで世界が満ちると、世界が幸いに包まれる、と信心が大切と教えてゆく。神の国、神の子、イエスの教えを説きながら、「新しい誕生」「一大変化」としての「新生」に進むべきと指し示し、しかも自分たちの生きる国は「敗戦によって、古い不信仰な国家は破れ果て」たのだから、「今は新しい建てかへねばならぬ時」だと現状をつかまえ、敗戦という破壊をくりかえさないためにも「新生して基督の巖の上」に、「愛する日本」を建てよと、「新生」日本で最初に開かれたクリスマス祝会の感話をまとめたのだった。信徒とつぎの時代を担う子どもたちをまえにした、キリスト教の聖誕祭においては、穂波は信仰の大切さを説き、それとともに、自分たちの愛が日本にむいていることをみなで確認したのだった。

ぎりぎりの心身をもって書きとどめた絶筆の「松籟海鼓 新日本建設と青松園の巻」で穂波は、自身の「赤裸」な「愛国心」をその精神の核とあらわしていたが、キリスト教への信仰にもとづくうったえや、教義をふまえた展望は指し示されていなかった。大島の「聖者」と讃えられた穂波の大きな変貌だとわたしはおもう。1942年から1944年1月にかけて発表された「灯火を翳せる者」は、そうした穂波とは異なる相貌をみせている。手書き手づくりの『青松』制作からその臨終までのわずか1年ほどのあいだに、穂波は化生した。そこには、敗戦と戦後の体験があった、というのが、いまのところの、わたしの見立てである。

#### □写真

- 1 頁 「水に水仙」……2010.2.10・・・国立療養所大島青松園霊交荘
- 2 頁 「大島の遠景」……2010.4.27・・・高松港
- 11 頁 「瀬戸内海と夕陽」……2010.4.28・・・大島
- 13 頁 「桜葉繚乱する」……2010.4.19・・・大島風の舞

## 「灯火を翳せる者」(1) (『清流』第9号、1942年11月1日)

## 第一章 祈の丘

陽はまさに水平線の彼方へ／悠々、帰り行かんとし／今日のつとめに暫時ながらも／別れ  
惜みて振り返る如く／オータ栄は紅<sup>くれない</sup>染めて／海も浪も、陸も山も／島も巖も映えてかゞ  
やう！／花は眠りに／鳥は<sup>ねぐら</sup>埒<sup>ら</sup>に／憩もとめて急ぐ時しも／いづこに搗くか鐘の音かす  
か……。

主のあれましのむかし博士が／星を仰ぎて進みしごとく／祈の丘に登る我が上に／夕つゝ  
一つ淡くキラメく。／心すがしく草に座して／静に暮るゝ空を仰げば／聖霊の御助を切に  
もとめつ／現し世の為め祈りやしげき。／黙思……黙想……！！／神をぞ慕ふ、神をぞし  
たふ／いづこに搗くか鐘の音かすか……。

大なる＝感動＝／わが心霊を捕えたり／歎びは充ち／全身はふるひおのゝく／夢か…  
…現か？／うつゝか……夢か？／我もなく、世もなく／幾その時や過ぎたりけむ！！／感  
動……靈感／天来の嵐に吹き倒されたり……。

ふと目を挙げれば／嵐は大いに凧ぎしずみ／淵の如き深き幸福の底に／静朗に我れありぬ  
……。／視よ、いつ何処より来りけむ／白衣を丈ながに着し／その首に黄金の鎖もて／  
＝灯火を釣垂れ＝たる者／右手に十字架の槍をとりて／間近に親しく和やかに／イみ  
居るを認めたり……。

つくづく相對して視るに／威ありて猛からざる武夫／勝ちの誉を印したる額／希望に輝け  
る顔／義と愛にむすべる唇／されど、その手足に苦闘<sup>あど</sup>の跟あり／全身に疲労の影あり……  
／彼は親しく我れに触れ／聡明なる眼に微笑をたゝえ／『我が肉、外なる人よ』／祝福あ  
れと言ふを聞けり……。

われ我が生命に会ひしか！／幼児のその母に対ひし時か！／苦しき程の愛を覚えれば

なり。／『われ、君を視ること／我が心臓を見る如く／又、自らの生命に触るゝごとし／  
愛と尊敬とに於て／未だ経験せし事なき熱心を覚ゆる／君と我と是れ一体にあらざる  
か！／されど汝の名を未だ知らず／何と……呼ぶべきか……』

この時、彼は／灯火を我が首に移しつゝ／『しかり汝と我とは一体なり／汝の悔改めて父  
に帰りし日に／＝汝の内に新しく創造されし＝／キリストの血に生れし永生なり！／  
罪人の内に顕れし『神の子』なり！／其後は共に悔ひ、共に祈り／共に闘ひ、共に感謝し  
たり／この後も永遠に共に在るべし／＝実に我と汝は一体なり＝』

全身たゞ感激にふるひ涙ひた湧く

羔は愛にいまして／愚弱の首なる我をも／花嫁と潔めて迎え給ふ／神は我れにのぞみ  
／われ神の床にのぼる／<sup>あわれ</sup>聖憐みの香は室に充満ち／われ御恵にむせかへる／<sup>み</sup>飲びの  
歌はあふれ／感謝の<sup>いき</sup>息気は荒くはずむ／ハレルヤ……インマヌエル！！

さるにても奇なる哉／＝十字架の槍＝／絶へず『自動』し／滴々と血液は流れ下る／  
彼は槍に一体なし／我が手に渡しつゝ言ふ／『奇と為す勿れ／この槍こそは聖霊により／  
汝が祈に応へて戦ふ／神の活ける聖言なるぞ／確く執りて凡ての仇に勝て』

われ槍をとれるに／滴る血汐／ことごとく灯火の油壺に入る／彼また灯火に一礼なし／  
『これ主に向つて燃ゆる／汝の信仰わが生命なり／主の憐みは限りなく／贖罪の血をも  
て育て給ふなり／信仰に忠なる者は幸福なる哉／主はその灯火を守りて／栄光の輝きと  
<sup>よ</sup>嘉祝し給へばなり』

わが魂は勇ましく／羽ばたきつ歌ふ……。

蒼空よ、大地よ／太陽よ、星よ、雲よ／山よ、海よ、野よ、河よ／島々よ、声を挙  
げて創造主を頌め奉れ……！／花よ香をあげて／島よ唄ひて／虹よ空を飾りて／  
贖ひ主を讃え奉れ……！

神は我らのため／義を建て愛を垂れ／その独子もて救ひの／御恵を成就なし給へり  
……！／いざ我ら進み行かな／灯火を高く翳して……！／いざ我ら勝ちとげな／十  
字架の槍ふりかざして！／暗の坂、荊茨の谷<sup>いばら</sup>などかたゆたふ／迷の城サタンの火矢  
などか恐れん／常勝の主は先立ち給ふなり！！

死の力、破れたり／冥府の門、崩れたり／仇は皆、地獄に蹴落されん／いざ勝鬨  
だ！！／視よ／キリストは暁明の雲に乗り／復活の栄光に輝き昇り給ふ／いざ祝勝  
だ！！／国も栄も富も能も／永久に父なる神のものなり／ハレルヤ……アーメン。

## 2

昼か、夜か、われ知らず／霊か、肉か、われ知らず／厳かなる時の流れよ……！

主に新らしく創造されし／＝わが生命＝わが側に在り／『わが生命よ／一体なるべき  
者の／斯く別れ居るは如何なる故ぞ／＝わが名は何と名乗るべき＝／自から判断に苦  
しむなり』／然り然らむ！／一体にして二つなる事／父、御子、聖霊の／三位一体なるが  
ごとし……。／また……夫婦は一体にして／二人として住むがごときか！／わが名はクリ  
スト者ならずや……。

こゝに於て悟り得たり。／『実に実に然り／われ汝に在り汝また我に在り／しかして時に  
一致して戦ひ／時に激しく互に相争ふ事あり／凡ての時、汝は強く我は弱く／汝は義しく  
潔く輝けるに／我は愚にして迷ひ易し／汝は天に属し我は地に属す。／汝は永生の宝珠、  
我は土の器なり。／されど我れ汝にあることにより／御救ひの確証を頂けるなり……』／  
語り終るや／彼は我が胸をかき開きて／奥ふかくひそみ入りたり……。

彼の我内に入りてより／わが目、俄に開けて／現し世界の相を見たり／つくづく視てある  
程に／憂の雲もくもくと湧き起り／悲しみの雨降りそゞぎて／たちまちにして哭き伏した

れば／灯火ほの暗くなり／＝救はれし者のみ知る苦悩＝／ひしひしと迫り来りぬ……

主の血に浴せる者の／生命の内に燃ゆる火あり／＝神の国建設＝の悲願なり。／事故を越え／個人を越え／神の国民の熱意に凝る／忠節……孝順／余念また、あるなし。／こゝに義に立ち／こゝに愛は忍び祈る／噫……救はれし者に悩みあり……。

時に、怪風一陣／われを吹きめぐりて／そくそくと鬼気の迫りきて／不覚にもわれ戦慄したり。／大地ゆるぎて／電光キラメクや／全身を嚴重に鎧へる者／暗黒を上衣となし／大刀の柄をとりて現れたり。／罪と死と冥府との臭ひ／渦を巻きて鼻をうつなり……。

彼、接近し来り／親しく手を伸べて言ふ／『友よ、平安なれ……？！／何をか憂ひ悲しむや／汝、享樂の詩を作り／若き愛情の酒杯に盛りて／世の中に贈れよ／戦ひ終りなば／我れ、享樂を世に起さむ／＝汝一躍詩人の名をなすべし＝／あな面白の世ならずや……』

『否とよ／汝、何をか目的する？／われ聞くに汝の言や甚だ悪く／＝サタンの標語の如し＝／汝、何者、名は何と呼ぶべき？』／我はこれ／世の光りにして／地上の大権なり王者なるぞ！！／『こは不思議にも又意外なり／光りとはエホバの他に絶えて無く／絶対の権者またエホバの外に無し／汝、何者なれば誇り慢ずるや……』／＝灯火ゆらぎ槍かすかに動く＝

彼れ二歩、三歩退き／大いに威厳を示し／面上に嘲笑と不満の影を走らせ／重苦しき圧迫を加え来り／呵々と笑へば口中より／怪火とび、草木うちなびかれたり。／彼、俄に態度をやはらげ／『オー善良なる我友よ／汝に幸運あれ……！／視よ／天は高くして地と異なり／南の涯のこゑ、豈北の涯に及ばんや／人の業、豈、神の意に止めんや／何ぞ、神のかへりみ給ふ処ならんや／地の権は『我が掌中に在り』／友よ！！／我を信ぜよ／さらば我れ汝を富ましめ／汝の欲するまゝに栄えしめん』

わが内の怒り燃えあがり／全身をふるひ起たしめたり／『否々、我はエホバの他は絶えて  
 ／＝何ものをも信仰せじ＝。／われエホバの他より何物も受けじ。／我れいま明かに  
 知りたり／汝は誠に地上の父サタンなるを…』／＝灯火かゞやき槍甚だ静なり＝／此  
 処に於て彼上衣を脱ぎ／空中にうち振りたれば／嵐は海をうちて濤は狂ひたち／山は頭  
 髪をふり乱してたけり躍り／黒雲は巻き起り雷鳴すごく／その暗きこと咫尺を弁せず／  
 彼の鎧へる金具のみ／蛇鱗の如く怪しくキラメくなり。

戦ひだ！／聖戦だ！！／この黒衣の主を倒すまでは／神国の理想は築けない／＝勝たね  
 ばならぬ戦ひだ＝／クリスト教はこれだ／＝平和を戦ひとる宗教だ＝／されど雄々  
 しかれ／神は我らの将である／よし……やるぞ！！／灯火を翳せる者は勇み立てり。

わが決意なれり／＝いまは返つて心静かなり＝／狂ひ躍れる黒衣の主を／注視してあ  
 れば／わが内に早くも勝算はなりぬ。／快心……会心／ほゞ笑みは自ら湧きのぼり／愚な  
 る舞踊師の／しぐさを見物するが如く／われ静座して……待ちぬ……。／（つゞく）

## 「灯火を翳せる者」(2) (『清流』第10号、1942年12月1日)

### 第一章 祈の丘

#### 3

黒衣の主は己がしぐさに酔へる如く／狂踊乱舞かえつて威厳を損したり。／突然ラブシヤ  
 ケの如く叫ぶ／『甘き酒に酔へる者よ／風を嚙む愚痴を棄てよ／エホバとは……何もの  
 ぞ！／汝の呼ぶ神は何処にぞ』／あな笑至、あな笑至なり／笑ひつゝ彼は我が方を見て／  
 静かに微笑せるを知り／面はゆげに近付き来たりぬ……。

彼、わが前に座し／学者の如き態度して言ふ／『如何に想ふや？／宇宙万物は自から生じ  
 ／凡て己が欲するまゝに活く／力は即ち活ける神にして／この他に神はなし……！／噫、  
 心地よき哉／科学はエホバの仮面を／残り無くはぎつゝあるぞ……！／汝の迷夢いかに愚

に過ぐるか……。

又彼は狡猾なる微笑を浮べ／又いと深き同情を示し／『我れ、汝が善良なる性を知る／その欲する平和と道徳を識れり／然も汝の希ふ！／理想の成就を我も亦欲するなり／されど……思考するに／先づ、現世を戦ひとりて／富と権力と智識とを……！／巧に利用せずば……！／いつの日にか実現せむ……？

この時わが手、槍に触れ／胸の灯火、＝〔扁が光、旁が皇〕々と燃えあがり／『さても汝はサタンなり／天地は神の創造の御業にして／＝エホバ統治なし給ふ＝／森羅万象一つとして／エホバの摂理の外に立ち得べき！！／それ人の智能なに程の事かあらむ／科学と言ひ哲学と言ふも／未だ知り得る程も識らざるなり！／創造主の御心を誰か量り得る？

われは確立して言ふ／更に灯火を高く翳げて言ふ／『汝、わが祈に対し／果してエホバ応へしやと嘲笑す／されど我は信じて疑はざるなり／エホバのみ神に在して／＝全智全能なることを＝／特に……我は宣言する……／平和も理想も／エホバの掌の他よりは／断じてうけず求めざることを！！／彼は静かに立ちあがり／全世界を指し示し／『視ざるか、この現実を！／火は我掌より跳り出て兵火となり／風は我が口より生れて思想となり／七ツの洋は人の屍にあき／五ツの陸は血に酔ひよろめくを／凡ての力、凡ての富／この一事に召集し尽すなり／『慾』これ全民族の好餌にして／これを得んと狂奔し噛み合えるを！！

彼は更に論じやめず／『思へ……最初の人アダム以来／全人類の心臓を探れ！／全時代の英雄の額を視よ／誰か＝我刻印＝を有せざる？／婦女子の歡ぶもの／青年の楽しむところ／何処か＝我が紋章、我旗＝の／飾られ翻へらざる……？／汝こたへよ／エホバの権いづくにかある？／われ激しき怒りに充ちたれば／舌おのずから活躍なす／『誇り高慢する者よ／黙れ、々々、黙し居れツ／さかしらなる口よ割け千切れよ／地獄の火に充つ舌を噛みて退け／偽りの心臓よ止まれ／地上とは何ぞ、富とは何ぞ／朝に起りて夕に消ゆ



る霧なり／世の勝敗亦定まりなし／汝の論拠これ空にひとしからずや。

われ一步進みて言ふ／『汝、アベルの血の声を知るや／ノアの方舟を見ずや／アブラハム  
……ダビデ／其他世々の東西の聖者を知るや／汝が非道なる反逆の下に／流したる神の人  
の血の勝利／＝ 永生の歌 ＝ を聞かざるか！！／十字架の愛に／甦れる靈魂の羽ばたき  
を／汝は、論じ得ざりしならずや……。／われ更に勝ちに燃えて言ふ／『汝また斯く論ず  
／即ち、各時代、各民族／これら皆、一片の肉を争ふ／虎狼に異ならじと……。／汝、我  
が愛する祖国日本の理想を視しや／＝ 八紘為宇 ＝ ／正義の剣は犠牲に振ひ／仁愛の政  
事は諸民族を興す／日の丸の旗風、これ神の／理想に動かんとするにあらずや…。

更に追撃する／『汝は輩下をもて叫ばしむる／即ち……破壊は建設の母／戦争はヨリ高き  
文明の父／思ひのまゝに本能の翼を伸し／慾に向つて勇敢なれ……と！／されど我が祖国  
の魂は／自己を忘れ奉公の念に燃え／神をおそれて人を愛す／凡ての美德は＝ 皇室中心  
＝ ／忠孝一本に発するに非ずや……。

わが心更に高揚す／『思ふに！／神の独子、救世主の道こそは／日本伝統の生命を潔めて  
／その尊厳いよいよ高揚するなり！！／我は＝ 神の子なり ＝ ／我は＝ 日本男子なり  
＝ ／確く信ず／祖国には汝のとゞまる事の／ながくゆるされざるを！／我また戦ふべし  
サタンよ去れよ…。

#### 4

黒衣の主は苦き顔をなし／されど声のみ勇しく答ふ／『オー立派なる神の子よ……呵々／  
オー勇しき日本男子よ……呵々／愚かし、おろかし／それでも神は愛なるか？、？／汝の  
現身こそは／＝ 神なき確証 ＝ ならずや？／汝、祖国愛を唱ふるも／出征に増産に何を  
か為し得る？／無為徒食の結構論者に栄あれ……。

灯火ほの暗く明滅なし／わが心深くうなだれたり。／『噫……われ孤島に臥して／仇に嘲

笑さるゝなり／＝この肉体ゆえに＝／神の栄光を瀆さしむるか／恐懼に絶えず……悲しき哉／……………！／卑劣なるサタンの戦術／人身攻撃に遭ひて／不覚にも一弾を負ひたるなり。

『我れ何故に母の胎を出しや／生まれし日よ呪はれよ／幼少にして未だ罪を知らず／潔らかなる若芽を／蛆と腐敗の底に投げ入れ給へり／根は枯れ、芽は噛まれ／一葉の飾さえなくて／髓と骨とを晒して／臭し々々といとひすてらる／死は招きしかど来らず／痛みと悩みと涙これ食物なりし！！』

彼の会心の笑を見たり。／『サタンよ、聴け！／我が悩み、我が悲しみは／汝と何の関係あらんや……！！／わが悲しみは／＝天父の栄光のためなり＝／わが弱きによりて／主の御名の穢瀆せられざらむ事なり／希くば……主よ／われを潔めて用ひ給へ／いかなる時にも汝は義しきなり。

灯火さかんに燃えいでたり。／『われ不治の床に臥して／人は何によりて生きるか／生命の光明を得たり……。／噫、感謝すべきかな奇しき摂理／涙のうちに愛はもられ／不遇の底に栄光は輝き昇る／『此者によりて／われ栄光を顕はさん』約九〇二／聖約は我れを活かしむ／われ先きに悲しと觀しことは／主によりて恩寵なりしを知る！

わが内なる者／全身にわたりて歡び踊りだしぬ。／『サタンよ……退けツ／我れ現、泣くは／内に宿れる神の血の／世を愛する熱心／即ち＝わが新生の悲願＝なり／この涙を量り得るは誰ぞ／＝神の羔＝のみ……！！／行けツ、退けツ／我はこれ＝神の子なり。

黒衣の主／わが論旨の進むほどに／蒼白凄惨の面を垂れみたるが／不意に劍をぬきて、すばやく／切りつけたり、するどき大刀風／アワヤ……と我れ後に倒れしが／この時早く、

彼の時遅く／十字架の槍はおどりあがりて／カチリと仇の邪剣を払ひのけたり／彼、更に  
剣を乱振して迫りしも／槍の力するどくして数十歩退けたり。

彼は狂せる如く／剣をうち振り／鎧をひるがへし／冒瀆の言を喚<sup>わめ</sup>き散らし／隙あらば攻  
勢にいでんと／呪詛、憎悪、眼を我より離さず／されど……槍は動かず／灯火は昼の日の  
如く燃え／我また勇氣と沈着とに／静座して祈り心に充されたり／天父への感謝に溢れた  
り……。

灯火は翳げられたり／肅然と高く翳げられたり／神の子心は爆発したり……。

御父よ……視たまへ／冒瀆の浪は頭を挙げ／全地を覆ひ尽さんとす／斯くて幾その時  
を経たまふや！

この時、仇は叫ぶ／『地は我が欲するまゝに戦ひ／混乱狂闘の浪、誰かせき止め得ん』

灯火を翳ぐる者／いまは眼中にサタンもなし。

われ泣きて祈れば／仇はあざみ、わらふなり。／われ病床に臥せば／仇は神ありやと  
論<sup>あげつら</sup>ふなり。／しかはあれども御父よ／＝我れ眼を汝よりそらさじ＝／汝の愛は  
蜜より甘く／汝の義は常にかゞやく／わが生命は光榮に溢るゝなり。

黒衣の主……怒り極に達し／幾度か剣をあげて投ぜん構えせり／灯火を持てる者、丈夫の  
ごとく／力と熱とに面は輝く

みちゝよ／汝は昔も今もはた永久に／＝唯ひとり神に在すなれ＝／聖旨は深くし  
て奇し／御計事は必ず成るべし／信じ従ふ者は幸福なり／み救ひと勝とにあづかる  
べければ！！

黒衣の主、恨めし相に／振り返りつゝ何処にか去れり。／灯火を持てる者、／右に槍、左  
に灯をかゝげて／歌ひつゝ舞ひ初めたり。

わが歎び、わが希望／わが力、永遠の生命／贖罪主よ、恵の泉よ／汝の翼はいと強く  
 ／仇の剣は千々に砕けたり／天地よ我と共に神を頌め奉れ！！／（第一章終）

「灯火を翳せる者」(3) （『清流』第11号、1943年1月1日）

第二章 虹の橋

過ぎた、過ぎた！！／悪気流は遠ざかった／暗黒の王は恥ぢ退いた／勝利の冠は／＝わ  
 が頭に戴かれた＝／灯火は清々<sup>すがすが</sup>しく輝く／視よ……！／槍は空高く飛踊する／頌栄は  
 祈りと和して高鳴る／感謝……感謝／歓喜に時は流るゝなり……。

灯火を翳せる者！／歓喜の眼を挙げ／天国を慕ひ／御空を仰ぎつ讃え歌ふ！／内なる  
 永生<sup>いのち</sup>は／琴もて和するか／音なき曲の／身ぬちに響き渡れる／われ酔へる心地して／  
 ＝ 霊化しつくし ＝ たり／たゞ恩寵の中に溶くるばかり……。

蝶よ、蝶よ、心の蝶よ／歓喜の踊りを中止せよ／静かに……静かに！／肅然たる……この  
 上より／＝ 迫り来る聖霊を迎えん ＝／預言の霊／＝ 奇しき恵を囁くなり ＝／御国  
 の門いまひらかれん／仰げ仰げ／仰ぎて待てよ／蝶よ静まれ……槍よ静まれ……。

灯火を翳せる者／深き憧憬よりの祈りに／御国を望みみれば／遙か……南方／詩人の神  
 秘の夢の床ありてか？／銀河の流れ入る処／密室の門扉、押し開かれたり。／暁明は音を  
 もたげ／栄光は輝き出で／探照灯の如く射し来りぬ……。

われ恐懼におののき／地に伏して拝し／更に起ちて拝し仰げば／密室の扉いと静かに閉ぢ  
 ／星座のまたゝく中に／大なる輝く星、一つ残されたり。／凧しづもりし海面に／光鉾  
 は映り／流れ留りし白雲に／染まり彩るは／＝ いかなる星か？、？ ＝／近づき来るら  
 し！／光り、明るくひろがるなり／近づきたり！／光り『円光』なり。／そこに来たる！  
 ／妙曲のともなへるを知る／オー、……………！！／冠は輝き／黒髪を長く後に垂れ／白衣

は雪の如くにて／たけながに着しその足を包み／その裳裙は光りを曳く／二つの翼は鳩の  
その如く／＝ 円光の中に羽ばたけり ＝／さすらふまに丘に達し／いと気高く立ち給  
へり。

灯火を持てる者／呆然自失たゞ驚異の眼を張り／知らず言ふべきことも！／御使はしとや  
かに歩み寄り／手を按きて宣り給ふ／『羔の宝血に洗はれたる者／新しき生命と詩の所有  
者／暗にいまも勝ちし勇士／＝ 灯火を高く翳げよ ＝／エホバの祝福をうけよ……！！

われ、こは何ごとぞと恐れつゝ座し／『愚弱なる虫にひとしき我れ／いかなれば斯く親し  
く／尊き御方の祝福を受くる／我は罪人の首なり／おそれあり我を去り給へ……。／御使  
いと優しく／手を取りて立たしめ／おそるゝ勿れ／芽出度し恵まるゝ者／今日エホバ汝を  
選び出し給へり。／いざ勇み起て／汝の祈り天倉に嘉納められ／御方の奥義を示して詩  
はしめ給ふ／いざわれと偕に巡りて／奇しき御摂理をうたひおさめよ。

灯火を持つ者／『こは何事ぞ／われは地上にても／無智無学のもの／いかで……詩ひおさ  
め得べき？／御使は手をふりて止め／『わが言に驚き又恐るゝ勿れ／ヤコブは（選）ばれ  
／御約束の前を歩み／モーセは法律を（賜）りて／神政の国民を導き立てしなり。／エリ  
ヤは聖言を預けられ／イゼベルの代と戦ひたり。／それノアの方舟は／誰の設計によりて  
造りしや。／ダビデ、ソロモン等を想へよ／代々の聖者は皆神の聖能に活きぬ／人の為し  
あたわざる処／神はこれを為し給ふ／＝ 神に於ては不可能はなし ＝

この時に槍は周囲をめぐれり／御使は更に語り給ふ／『ましてや、羔の血に／新しく生み  
出されし者は／＝ これ神の子なり ＝／御使の世嗣、大なるものなり／汝のうけし御救  
ひこそは／代々の聖者らの如何に憧憬し！／オー十字架の贖罪の聖徳／栄光の復活、永生  
の体験／聖霊の諸徳を詩ひ得ざらんや／聖霊の力は汝の生命にあり／預言の詩は汝の口に  
あり……。

灯火を持てる者／歓び充ちて言ふ／『われ如何なれば／尊き選みに預りしや／希ば……その如く詩はしめ／その如く預言なさしめ給はん事を！！／この時、何処よりか合唱起れり  
 十字架の血に／潔めぬれば……ハレルヤ／来よとの選び／われはうけぬ……ハレルヤ  
 ／主よいまぞゆく／聖旨のまゝに……ハレルヤ／なが奥義を／詩はしめ給へ……ハレルヤ／ハレルヤ、アメン

## 2

聖愛の感激に／灯火は息<sup>いき</sup>づき／胸底にまで燃えひろがり／耐え難き歓喜に／押しつぶされむばかり／歌ひても歌ひたらず／踊りても踊りたらぬなり。／われは、ついに／笑ひつゝ泣き／泣きつゝ笑ひ／灯火を高く々々うち振りたり。

御使ひ空に手を差上るや／栄光の雲かゞやき降りぬ／その様、谷に霧の込むごとし／暫時が程は光雲に包まれ／御使と彼とは／さながら浮刻の如くにてありき！／時に何処よりか／妙なる楽の音のおこり／曲の進むと共に／光雲は上昇し初め／視よ天地は晴れいでたり。

清朗の大空を横に／＝七色の虹の橋かゝりたり＝／遙より一塊の火焰ころげ来れる／こは何事の起るにや？／驚きと<sup>あやしき</sup>奇とに心さはだちぬ。／さる程に早や近付き来る／これ一輛の車なりし／火車にあらで靈火に包まれ／紫雲を発する車駕／六つの翼ありて飛行す／その動くや馥郁として香るなり。

御使は車を止めしめ／『いざ汝、われと共に乗車して／御方の真理の奥殿に昇るべし』／余りにも神々しき有様に／われ伏して拝<sup>す</sup>さむと為れば／御使、急ぎ止めて言ふ／『拝すべきはエホバのみ！！／われこれ主の最少の走り使のみ』／彼は親しく我を車内に引入れ／主に栄光あれと右手を挙げれば／音もなく車は虹の上を迂り出しぬ

風に流るゝ雲のそれか！／伸びゆく光りのそれか！／六ツの翼、羽ばたきて速し／噫……  
大地よさらば／＝ 祈の丘よ ＝ さらば／遙に見下す祈の丘／草の上に伏して祈れる者あり／人のごとし……又われのごとし／我か？、人か？／みきはむるひまさへなく／眼界の外に凡ては遠去りたり。

御使は微笑みつゝ訓し給ふ／『汝、後の事を忘れ／前に展開する処に心せよ！／且つ汝、自らの小さきを恐れて／＝ 賜はる詩魂 ＝ に従へ／誰か選ばれずして聖詩を作す？／選びと偕に聖能を賜ふなり／御方は、汝の内に／詩魂を豊かに呼び起し給はん／信じて勇め！／詩人よ汝また預言者なり……。

この時、空中より合唱起れり

祝福されたる／詩人は幸福なる哉／戦場にも／ダビデは歌ひつゞけ／南欧の聖恋は  
／潔められて／三界の妙曲となる／盲者の目は輝きて／エデンの園の流より／人生の  
明暗を掬めり

めでたし日出る国／栄えを得たり。／路傍の石／こゑあぐべし。／海の子ら／その歌  
をならひ／陸の娘ら／恋を抱かむ！／心の空、星は生れ／まことの光／充ち渡りなん  
……！！

灯火を持てる者／全く恐れを沸ひて／『我はこれ神の器たり／さるにても／慧き者、強き者、多き世に何故／幼児の如きわれを選び給ふか！／御使は厳かに訓へ給ふ／『誰か神と計り／何者か神に教ゆる／神に能力をかし富を加へんや／御選びは＝ 聖旨 ＝ により／昔も今も変り給はざるなり……。

また御空に合唱あり

エホバば頌むべき哉／その選びは尊し／むかしも今も／永久にかはり給はじ。／羔に

栄光あれ／宝血は世を洗ひき潔め／死せる者を活かし／捨てられし者を選び／永久  
の生命の／子らの内に加え給ふなり。

神の子は／神を愛し慕ふ！／人の子は／人を愛し慕ふ！／神に在して人と成れる／  
贖主こそは／天と地との通路なれ！！／虹の橋は懸りたり／渡り行く者に／  
御たすけさにはあれ／ハレルヤハレルヤアメン

『みつかひよ／彼の合唱は何人らぞ？／また、君の御名は何と呼ぶべき／＝御方よりの  
将軍とは知れど＝／御使はいと低く

われは小さきガブリエルなり／汝……知らずや／この車と共に天群のあるを！  
さては神殿にてザカリヤに／ナザレにてマリヤに顛れたるは／この御使なりしかと親しま  
れぬ。

羽毛より軽く／橋上を車は迂り進む／救はれし身の光栄、歡喜／過分なる尊さよ／されど  
我が心は／ふと鉛なまりよりも重くなりぬ／＝愛する同胞一億を思ひて＝／噫……我れ地  
獄に落つるともよし

一億同胞の救ひの為めならんには  
希ば＝祖国日本を＝と／祈り心の内にむせかへるなり。(つづく)

#### ■「灯火を翳せる者」(4) 長田穂波 (『清流』第12号、1943年3月10日)

##### 第二章 虹の橋 (つづき)

### 3.

誰か生地を忘れ得む！／誰か血族をおもはざる！／苦難の海に浮き沈み／生死の瀬戸に藻  
搔きつゝ／呼ぶは＝母なる生地なり＝。／特に大和の国民は／生きて皇国の盾となり  
／死しての後も尚強く／護国の鬼とならむこそ／祖先に受くる赤心なれ／こは我が身内  
に流るゝ血汐なり。



灯火を持てる者／うち首垂れて言ふ／『御使よ／わが愚を憐み給へ／＝手を鋤につけて  
／後を振り返ること＝』／聖旨にかなわざる事を知れど／いま我内に祖先より嗣ぎし血  
の囁く

国をおもふ心ひとつの外ぞなき

極楽などに行きたくはなし

＝地上同胞の救ひや如何に＝

われ涙を止めあえず言ふ／『されど現<sup>いま</sup>や地上を離れ／救はれし者として視る処／地球その  
ものを愛し慕ふなり／全人類は兄弟ならずや／＝全兄弟の救ひをぞ希ふなり＝／これ  
地球は我が古里にして／なつかしきものなればなり。／忠信なる者らの待望／御方の『地  
上王国』の出現／その喜びの日は何時ぞや？

御使は、憐みの瞳を我にそゝぎ／厳かに、謙遜に、語り給ふ／『たゞ御方に在りて安んぜ  
よ！！／地上の走路は／パトモスにて黙示されてあり／その以前バビロンの王宮に／ダニ  
エルを通じて示されたり／こは万国万民の代々に渡り／＝慎みて読み且つ信ずべきなり  
＝／又、地上王国の(主の日)は／エホバの外に誰か定むべき！！

御使は更に訓し給ふ／『汝、祖国の愛に泣くか！／地上に国は興り国は亡ぶ／ギボン達は  
歴史をあむ／詩人らは古城の月に涙す／＝国の興亡は聖<sup>みて</sup>掌にあり＝／それ不信不義な  
る国は亡び／正義仁愛の国は輝くなり／力あるが立つに非ず／小なる国が弱きに非ず／  
＝汝祖国の興亡を計れよ＝

御使は書を開きて示し／『ハランに人多かりしも／選ばれしはアブラハムのみ／ヤコブに  
子多かりしも／愛<sup>め</sup>で用ひられしはヨセフなりし／それバビロンは偶像に倒れ／ロマまた  
不信に亡びたり／個人と国と神にけじめあらんや！／＝されば汝、祖国をして／信仰の

義に立たしめよ — /これ忠君愛国敬祖の最善の道なれば！！

灯火を翳せる者 /車上に立ちあがり /踊り跳ねつゝ歌ふ

ハレルヤ、ハレルヤ /神は義にのみまし /愛にのみし給ふなり。 /その御審きや正しく /その憐みやゆたけし /さらば信ぜよ /豈、正義の人亡びんや /など仁義の国倒れんや……！！

義とは何ぞ /神を崇め従ふ道なり /愛とは何ぞ /犠牲に勇む赤心なり /われは祈る /桜花咲く国 /日の出る国 /汝、世界の柱となれや /享けよ福音 /信ぜよエホバ /ハレルヤ、ハレルヤ！

斯くて我心、聖言に燃え /真理の淵に深く潜りぬ /『みつかひよ』 /われは想ふなり /ペルシヤの山の頂きに /咆哮たかく雲をよび /怪光四方にはしらせて /世界の夢を破りたる /獅子王とほく印度まで /黄砂を高く蹴上げ来て /陣営照らす月に立ち……。

征服すべき血は尽きしか /何ぞ世界の狭きかな……！ /オー忠良な参謀よ /彼の照る月の世界をば /征服すべき路もがな！ /月球界に昇る路なきを嘆じたる /王者の勝利と生命は /かげらふの如く消え失せぬ /神の指！ /ふるゝも待たで不信者は /うたかたよりも、もろき哉……。

更に想ひはめぐる /灯火の影に明滅する /『コルシカ』島の岩間より /吹き起りたる大嵐 / — 不能の文字消しされと — /思ふがまゝに国々の旗を /おしみなく吹き倒したる英雄も /モスコ<sup>あと</sup>ー後にボロヂノオ /音なく降る白雪に /追ひたてられし其日より /王冠は泥にまみれたりけり……。

夕月高く澄む時に /不信を悔ひつ淋しくも /南海の濤間に沈みたり /パリ街頭に聳えたつ

／凱旋門に風寒むく／空しく夢の跡をとどむる！／御方の聖手の審判の前に／誰か……  
 論<sup>ちげつ</sup>らひ得んや／われ敢えて疑ふに非らざれども／御使よ、御方の光威の道／その活ける奥  
 義をぞ知らまく思ふ！！

御使は静かに頷き／『過ぎし路を汝、知れり／いま進む路を知るや／＝見ずして信ずる  
 者は幸なり＝／御方の路は自由無碍なり／何処か及ばさる、然れど悟り難し／地の智能  
 には／永久の謎……とや言はむか？／さらば、いまより後、示さるゝまゝ／詩<sup>うた</sup>ひおさめよ、  
 汝が詩により／或は悟り得る者もやあらん……。

#### 4.

紫色かゞやく飛行雲を引きて／虹の橋をゆかしくも飾りつゝ／わが乗る車賀は迂り進む／  
 前後左右に上下に／千よろずの星は手をふりて／歓送迎の中を行く……。／御国へ着くは  
 何時ぞ／空の幾里やよぎりけむ／六つの翼は音もなく／善且つ忠の姿そのまゝに／いと平  
 安な空の路かな……。

ふん虫が脱殻して羽虫となり／空中を飛び空に遊ぶごと／身も心も清澄なるうれしさ／た  
 だ軽々しく立ちまわれど／何れも皆、謙遜にして敬虔なり／蝶の如く舞ひ／蟬のごとく歌  
 ひ／花の如くかほり／星のごとく輝くか／浄化！、聖別！／霊か？、肉？、御使のごとし  
 ……。

灯火は燃えて／わが全身全霊に映え／十字架の槍は／わが右側にピッタリと着きてあり。  
 ／『御使よ／御国は未だ遠きや？／余りにも時過ぐるならずや？／御使は慈愛の手を我が  
 頭に按き／『準備とゝのへば近し！／それ御国は直前にあり／また無限の外にあるなり。』

御使は更に我内に指を差入れ／無言のまゝに頷きたれば／＝悟りの智識めさめたり＝

キリストの血に／新しく生れし生命よ／汝が人のふるき罪の殻を／いかに永く附  
 着しめたるか／神の子の完成！／地上に果して見るや／悔ひて悔ひ又悔ひて悔ひ

悔ひて悔ひ／悔ひに泣く身となりしうれしさ……。

実に御国は近きなり／たゞ弱き穢こそ大なる距離なる。／御使は言ふ／『時は恵の使命を刻む／いまは恵の時、救ひの日なり／汝……憂ふること勿れ／地上に於てさえ／鄙娘の王宮に召されし時／三月の身潔めと行儀を見習ふなり』／然り、然り、誠に然り／＝ 実に神の御愛は義しき哉 ＝

御使ひは尚も訓し給ふ／『汝……むかしの話を思ひ起せよ／シナイの牧羊者モーセは／御方に召されたる時／火を視て靴を脱ぎしならずや！／祈の人イザヤは／神殿の内に座しみたれど／火にて潔められしにあらずや！／されど汝は幸福なり／既に宝血によりて潔められたり／ただ心意の準備欠げみたるのみ。

われ感謝の一礼をなし／＝ 我れ潔められたり準備はなれり ＝／いまは御国の光威をもて満されたり／天もなく……地もなく／御使も、車駕も忘れ／たゞキリストの生命のみ輝くなり。／灯火は光波を無限に張り／槍は縦横に勇躍なし／身はかるく／霊は光栄に大丈夫の如し／＝ 救ひ主に御栄えあれ、アメン ＝

この時、大合唱は湧き起れり

奇しき十字架の御救ひに／新しき創造の永生のみ／御方に／新しき頌讚を捧ぐなり  
／潔められし／婚約の娘はいま飾りて／祝ひ殿へ昇るなり／準備はなりぬ／婚宴の席はとゞのひぬ／ハレルヤ……アメン

虹の橋／花嫁のために懸れり／迎えの車／いまかへりたり／うるはしき生命の花／かほり高きかな／いざ、われら／琴をもて歌はん／御恵みの子の／幸福の大なるを／ハレルヤ……アメン

花嫁は詩をうたふ／血のうたをうたふ／その詩は／ひくゝして高く／地に起りて聖座に昇るなり。／花嫁は香をたく／かほり強き愛の香を！／彼は、しとやかに振舞ひ／その面は歡びに輝けり。／いざ、われら／歡び迎へなん、花嫁を！／（第二章 完）

■「灯火を翳せる者」(5) 長田穂波（『清流』第13号、1943年5月20日）

第参章 透明幕

虹の橋、つくるところ／車駕は静かに止まったり／紫雲たち込めて香りたかし／御使は、やをら立ちあがり／輝く『白衣』を我れに着せしむ／＝羔の紋章＝は／鮮明に紅血の色に染められたり／この白衣なにか言ふ／オー羽衣とはこれならむか？／三保の松原……悲しき天使！！／ふるき物語など想ひ起したりき。

噫、白衣をまとふ身の軽きことよ／われ胡蝶の如く舞はんと思ふ！／御使は＝いざ下車せむ＝／汝、信ずる程に飛行せよ／＝真理は自由を得さすべし＝／下車せむと為せば二つの翼／両脇に生じて羽ばたくなり／あな面白！！、と叫べば／御使＝祝福あれ＝と和しぬ／紫雲は晴れたり／車駕は遥かに退きたり……。

十歩すれば羽はゆるく／百歩すれば身は空に浮く／＝靈の羽ばたき＝／わが心、童のごとく／歡喜に充ちて天翔りて／遥に車駕を追はむと勢へば／大巖に突き当れるごとき／激しき衝動に倒れたり……。／手もて探るに／玻璃の壁、無色透明なる幕／わが視力を越えて立てるを知れり。

われ、玻璃窓に迷ひ入りし／蝶のそれか、小雀のそれか／或は高く又ひくゝ／右に左に探りに探りたるも／その広さ、その高さ／その長さ、その厚さ／計量なし得べくもなく疲れたり。／こゝは何処ぞ！／この壁の基礎は何ぞ！／我れ、御使のもとに座して黙視す。

壁の彼方！！／顕微鏡下を望む如く／一居、一動、明らかに／みな其の髓を迄あらはに／  
オー秘めし想ひも皆のぞかるゝ／＝かくれて顕れざるなし＝／御使は指し示して／  
『視よ、主の聖前に於ける姿を！！／この幕は神の御目にして／主と宇宙万有との距りな  
り／是また直前にして遠きものなり。

御使は更に説き給ふ

此方より彼方へ出入は／明かにして自由なれど／彼方にある者の多くは／この壁は暗  
黒にして越し得ざるなり／汝、エホバの権威をうく／＝神聖の秘幕＝をも／鳥の空  
中を翔るごとく／魚の水に遊ぶごとく／自由無碍に往来かなふべし／主のゆるし無き  
者は不可能なり。

妙にも奇しき御摂理なる哉／＝凡ては神の直前にあり＝／＝凡ては神の掌中にあり  
＝／聴け……壁の彼方／汝の足下の石の叫びを！／視よ……野の草の／神へのあいづ  
を！／善きも悪きも凡て報告されつゝあり。／冥府も神の直前なり／如何なる暗も聖眼を  
おほひ得んや／＝実に神を畏るゝは智識の本ぞ＝／われ視てあるに／白馬に乗りし御  
使／救、赦免、勝利、復活等の印を持ちずしづしづと過ぎゆきたり。／間もあらず黒馬に  
乗れる御使／飢餓と災禍との計量器を振りつゝ／のろのろと過ぎゆきたり。／時に赤馬に  
乗りし御使／弓矢を持ち大刀を背負ひて／あわたゞしく走せ過ぎたり。／透明の幕ありて  
無きがごとくに……。

更に視てあれば／青き馬に乗りし御使／高慢と享樂と虚偽と利己との袋をさげ／哄笑し  
つゝ過ぎゆきたり。／最後に引つゞきて／灰色の馬に乗れる御使／疫病と死との酒杯をと  
りて／力強き鞭を鳴しつゝ過ぎ行きたり。／彼ら我が御使に一礼して／壁を過ぎゆく……  
過ぎてゆけり／ガブリエル礼を受けて／或は禍、或は幸、と頷き給へり……。

これらの過ぎゆきし後に／『汝……旧きと新しきとの／二つの御約束を記憶せよ！／エホ

バの摂理は予定と約束により／着々として必ずなる……！／いまゆきしは我が友にして／  
主に忠実なる兵士らなり／審判は行はれ、賞罰はならん／＝地は故知らずして／運命の  
業と言へり＝／愚なる哉、聖旨の外に何か起らむ…。

灯火を持てる者／槍を振りつゝ舞ひ且つ歌ふ

五羽の雀は二銭なり／その小雀の一羽さへ／御ゆるしなくば／軒より落つる事あら  
じ／名もなき／野路の草花も／よそはせ給ふは／主のみわざなり／しろしめし給ふ  
は神なり。

地にて観るか／悪のさかへ善に禍？／されども神は／義しくいまし／『永遠』の時  
間に／報ひをぞたまふ……。／暫時の笑みか！／永久の苦か！／この世の栄の消ゆ  
る時／御国に消えぬ栄ぞあり／御国に善の光りあり。

御使は／いざ……われらも行かむ＝／心の扉に詩ひ刻せよ／御方の奥義は／聖光の下  
に展開せん／＝神秘の幕は切落されたり＝／いざ……ゆかん／栄光の限り走せめぐら  
ん哉！！／壁に向へば早や開けて／過ぐるとも無く過ぎしを覺れり／＝こゝは創造さ  
れし奇しき世界＝

## 2

行く程に冥府に達したり／深き穴の中、暗黒に渦巻き／怪火メラメラと絶えず明滅し／蛆  
虫の類、鋭き歯を鳴しつゝ動く／その数、幾千万なり／鬼気はみなぎり／殺気はうなれる  
……。／われ一目して戦慄し／数歩、後へ退きたり／硫黄の煙／空高くのぼり浅間山の如  
し。

腐臭と黄煙との昇る処／秋の野分に散る木葉か／嵐に乱るモミガラか／無教の男女、落ち  
込みて行く……。／罪と科との燃ゆる火の／薪となりて、うめくのか／無教の飢えし蛆虫  
の／毒牙の中に、もがくのか／雨と降りくる星のごとく／絶えず地獄の穴に落つる／＝

地上の人の死後かなし＝

御使、我をうながし／いざ地獄を詩へ、視るがまゝに！／かくて我ら穴深く降りゆきぬ。

／灯火、静かに燃え／槍の血の滴りしげし……。／噫……地獄は広きかな！

『亡ぼし過ぐる勿れ／亡ぼし過ぐる勿れ／全滅は……／我らにも悪しければ！！』

叫ぶものありき……？

御使、我を振り返りて囁く／『彼の叫びの意味を知るや／サタンの号令なり／彼は宇宙生氣

の全滅を恐る／そは不毛荒廢の地に独り残るは／彼れ自らの失望と空虚となれば！／記憶

せよ！／建設なき破壊の極致は／破壊者自からの破滅なり。／実に創造主の外に

＝ 永遠の生命の栄えあるなし＝

御使ひは更に訓し給ふ／『サタンは専ら／＝ 神への反逆＝ に熱中する／彼は永遠の創

造に対して／永遠に破壊を目的としてゐる／一度び破壊作用を起したるものには／＝ 其

永続と深刻とを希望する＝／さればサタンは／神と信者とに向ひて／激しき襲撃の機を

ねらふなり／さらば立てる者は守りて倒されざれ！

御使は我が耳に口をよせ／いと、ひそかに囁きたまふ／『彼の戦術たるや／反逆、冒瀆、

甘誘、脅迫／あらゆる方法の限り尽すなり／それ彼の捕虜とならむかす／偶像、迷悟、頑

愚、欺偽、狂暴／穢汚の中に満足せしむるなり／＝ 罪に座して罪を悟らず＝／＝ 自

ら高慢<sup>たかぶ</sup>りて神と称<sup>との</sup>ふ＝／神の道を曲げて自らを正しとなすなり

灯火を持てる者いふ／『われ、罪とサタンと地獄の関連を／ミルトンの詩魂に問ひ／地獄

と煉獄と天国との実相を／ダンテの祈の幻に視る／現実の迷悟の態を／仏哲に入りて問へ

り／人も国も礼典祭祀に順ふの難きを／孔孟の書に照して知る／噫…世は挙げてサタンの

掌中にあり／悲しき哉……悲しき哉……！



われ泣きつゝ想ふ

人の『良心』よ／汝も救はれざるを得ず／そは……よく眠ればなり。／サタンは善き習慣／生命なき形式もて／汝に醉眠を深からしむ／視よ善き名の下にて／如何に多くの醜き／罪悪が活歩しつゝあるかを！／愛する祖国よ反省せよ……。

さて進む程に／穴底近くなれる処／廻路のかたはらに石ふみあり

慾はらみて罪を生み／罪なりて死を生む！

御使は我を引止めて／『こゝはアダム以来の歴史なり／此の暗黒の活劇こそ地獄なり／（されど他に輝ける歴史あり天国なり）／汝これより思ふまゝに問へ／或は悟るところ多からむか？

さて進み行く程に／濁流の中に浮き沈みつゝ／泣き叫べる世界を見たり／悲惨の極み！／我が前へ僅かの距離を／いたましくも流れ来し男あり

噫……ノアよ／方舟をもて我を救へよ

斯く叫ぶを聞けり／わが心、燃えたれば助けばやとて／手を差し伸べしも及ばざりき……。

御使は厳かに宣告し給ふ

汝、この後／いかなる事にも／決して決して／手を伸ぶべからず

ここに於て我れ答へたり／『わが涙、内に湧けば／手足おのづから進むなり／御使よ、御使よ……！／御国の使達には涙なきや！！／わが声いつしか不満にふるへみたり。

御使は厳肅に我に立ちむかひ

汝の涙は尊きものぞ／又、我らに涙なからんや／されど知れ、刻銘せよ

＝ 審判の後には涙なき事を ＝／噫…涙ある内に悔改むる者は幸なり。

それ凡ての事に時あり／悔改むべき時に改めずば／齒かみ悲しむともおよばじ

＝いまは恵の時、救ひの日なり＝／この誓言の奥意を知るべきなり……。

実にエホバに愛涙あふるゝなり／洪水にさきだちて／御涙の声をノアに託され／あまねく  
全地にふれしめ給へり／いま流れ過ぎし男も女も／＝ノアよ方舟もて＝と叫べり／彼  
ら聞ける故にいひのがれ得じ／彼ら見て信ぜざりしなり／それ……救恵の涙をこぼみし者  
は

永久にほろぶより外なし

われ深く御使に感謝して順ひたり。／（つづく）

■「灯火を翳せる者」(6) 長田穂波（『清流』第14号、1943年7月20日）

第参章 透明幕(つづき)

3.

洪水は過ぎたり／黄砂の原にさしかゝりぬ／木乃伊<sup>みい</sup>の如き男女多く苦しみゐたり／蝙蝠  
は彼より是へと／飛びうつりつゝ人の肉をば／つえばみゐるなり。／われ声高く＝これ  
何人ら＝と問ふ／＝何もの＝と応じて／おもむろに近附き来るものあり／噫、何と  
古き木乃伊ぞや／ロダンの手に生れし彫刻の如し……。

われロダンに非ざれば／悪と、醜と、不具との中に／美ありとは知り難ければ／気味わる  
く思ひつゝ対立したり／暫時……黙しゐたるも／わが心おちつき静かに挨拶して／『現し  
世より訪れし小さき者なり／希くば貴下の時代の相<sup>すがた</sup>など／承らば後学とならむにと欲す  
るなり／もらし、たまはらずや……と言へり。

わが挨拶を聞き終るや／彼は満足気に言ふ／『近頃この処に来る子供達／いづれも生意気  
にして礼を知らず／然るに汝、甚だ礼儀なり／何にても問へ、教へん／われはエジプトの  
パロなるぞ。／オー、パロ王なりしか？／われ驚きたり、且つ喜びたり／＝世界古代の  
事共を知らま欲し＝／思はず我は二三歩進み出たり。／パロは我が問ふをも待たで語り

出たり／『子供よ／われパロ・ラメスの言ふ事をきけ！／汝、人類の歴史を知るや／神々が  
天地をつくり／石、草、木、きねづみ等／進化の妙工の高峰に立ち／人類文化の源泉とな  
り／国家思想の種を植えしは／エジプトならずや／斯る時他民族は如何にありしか！

パロ・ラメスは／甚だ得意に語りすゝむ／『人間の始祖の地と誇る／アラビヤは何か？／ヒ  
マラヤは何か？／砂原であり山猿に過ぎぬ……／ジャバのベンガワン河／太平洋の風渡る  
ところ／はえ出し者が何か？／彼らは木であり海草であり／無為無能の虫に終つてゐる…  
…。

彼は自負心に全身をゆすり／一段とこゑに力を込めて語る／『然るに我れパロは／農神(暦  
コヨミ)を呼び起し／田園を開拓し原料を作り／工業を初めて加工製産したり／軍兵を集  
めて戦車を走らせたり／また芸術の神をして立たしめ／都市を建て美術的に飾りたり／貢  
物、税制を定め、船を海におく／世界文明の母は我にあらずや！！

パロの自慢話の涯は何処ぞ？／彼の言の絶間に我れ言ふ／『王よ、われ言ふことあり／ナ  
イルの流れは大なる富なり／エジプトの砂は黄金を含み／隊商の夢は月下にうたふ……。  
／それピラミツドは／現代にも尚ほ驚異的にして／偉大なる記念として仰がるゝなり／地  
下に叫ぶハピラスは／実に王等の大業を告ぐるなり

パロは絶えず頷き／甚だ満足の状態にて聞けり／『王よ、民族的無自覚なる時代に／既に組  
合を作り統制をなし／王国の基礎を建て／政治、軍事、産業、衛生／見事に天下を治めし  
は偉なり。／されど王よ、われ問ふ事あり／汝……神の人ヨセフを語れ／彼の徳はエジブ  
トに溢るゝならずや／汝……神の人モーセを語り給へ！

こゝに於てパロ俄かに激怒し／暗を巻き地を蹴りつゝ叫ぶ／『汝、最初の言へる事や善し  
／されど最後の言や悪し／モーセか……モーセか／彼は大反逆者にして／忘恩の憎むべき

もの／神の人など片腹いたし／黙せ、黙せ、仇にして恨や多し／われ飼ひ犬に心臓を嚙まれ／菌毒は永久に我を悩ましむるぞ！

灯火を持てる者／いまやパロに対して心おだやかならず／『噫……パロ・ラメスよ／汝と汝の国との誇りは何ぞ……？／その栄華は何ぞ根なきか／立ち昇りし煙か／夢に咲きし花か／はかなき哉、はかなき哉／汝の偶像と物質文明とは／恥を幾千歳に止むるのみならずや！／我は知れり／汝は紅海の水底より／此処に来れるなり……。／ヘブル人に関しては／汝こそ＝忘恩ならずや＝／汝の誇りとは何ぞ？／強食弱肉……動物的にして／脅迫、搾取、掠奪……／利己、放縦、享樂……／これらの外はなし。／パロ益々怒りを加へ／何か叫びつゝ狂ひ出せり

噫、神の御旨を畏れず／＝己が腹を神とし＝／偶像と物質とに立つ！／かゝる人は禍なる哉／かゝる国は呪はるべし／これ豈、パロのみならんや！／これ豈、エジプトのみならんや！

パロは呪ひの叫びを挙げ／われに掴みかゝらんとし／大浪の嘲笑は彼を包みて鳴る／その騒々しさに暗は遠く迄震ひたり。／この時突如として／近くの暗の中より声あり／『やい、老いぼれめ／又しても自慢話か、八釜しいぞ／迷信亡者、地球の古苔／＝力＝は神だ！！／力の他には何ものも無いのだぞ！／力ある者は自ら救ふのだ／力に見放されると暗と死とだ／力は生命だ／力を征服する者は力だ／富も……名誉も……女も恋も／力へ媚びを売るものだ／力なき者には墓あるのみだ……呵々

#### 4.

地獄は自己のうめきで一杯した処／ゲヘナは情慾の火にこげる処／地獄は我儘不信の蛆に満つる処／我れ暗に向つて問へり／『自我を強調し／＝力を光り＝となし／人世真理は力が造るなりと言ふ者よ／＝力は多くの犠牲を吸収する＝／人情を無視し、感情を殺し／力の意思を徹するこそ／『王者の権徳なり』と信ずる者よ／ニイチエの子よ／汝……われに答へよ……。

『汝はイエスの十字架の犠牲を／女々しき弱敗に過ぎずと観たり／されど犠牲とは何ぞや！！／弱きところに犠牲なし／＝犠牲は強者の輝きなり＝／塵程の犠牲を払ひ得る者／塵程の富と力と光を有するなり／＝出し得るは有する故なり＝／この真理を、汝、想はずや／それ力は犠牲として崇高なり／母は嬰兒より弱きか！／明君は貧民より弱きか！／神は我らの罪より弱きか！／暴虎氷河の勇／自らの力は己を破るのみ／＝最後の勝利者は誰ぞ？＝／聞けや……！／セントヘレナの巖頭／英雄の肺腑を突き出づる叫びを

噫……ナザレのイエスこそは／まことの勝利者なりしなれ！

冥府は総決算の決定にある／されど尚ほ誤算の数をかぞふるなり／こゝに自ら滅亡の苦を荷ひて／永久に暗と火と蛆と尽きざらしむか？／行く程に眩くものあり／『世に有閑階級ほど憎むべきはなし／彼は資本主義者、搾取者なり／政治家を買収して／私利の為に××を製造する／如何に多くの無産階級の／幸福と生命とを横領しつゝあるか！

ついに彼は叫び出せり／『山も海もその中の物も我らも／科学的原理によりて生成せり／されば＝自由なり平等なり＝／神など有るなし／××など有害無益の長物なり／凡てのもの／あるがまゝに／あらしめよ！／頭首をつくりて自ら奴隷となる勿れ／社会意識とは愚心の夢みる怪物なり。

この時に突如として怒鳴る者あり／『馬鹿野郎ツ／科学的生成の世なるが故に／個に於て見るべきならず／全体として見るべきならずや／特に＝人間の社会性は＝／『社会意識』の所産であり要求なり／人類の幸福と進化とは／社会意識の下に共同××にあり／両者相互に争ひてゆづらず／ついに腕力にうったえんばかり……。

灯火を持てる者／心におもひめぐらすなり／彼らの主張する処、<sup>ことわ</sup>理りなきに非ず／＝人

間社会は間違ひ多し — /されど残念なる哉/彼らは社会原理の根本をあやまてり！/  
『唯物主義』の悪水に溺れし者よ/ — 人はパンのみにて生きる者ならず/靈魂の要求は  
『永遠の生命』 — /人の思想は神に通ふ！/斯る本質的『自己』を偽る勿れ……。

われ想ふに/人の社会を造るは愛と理想とによる！！/ — 愛の本源は神より発し — /  
— 理想の帰着は天国にあり — /神を崇め、隣人を愛す/こゝに社会奉仕、犠牲はあら  
はるなり/個性こゝに立ちて尊く/国家こゝに建ちて芽出度し/希くば祖国よ、同胞よ/  
この信仰に根ざし斯の理想を望み/世界に神の御国をうち建むてことを！！

更に進む程に/樂器を投出して悶え悲しむ者あり/何人？、近附かんとせし我が足先に/  
軽く触れし物ありたり一冊の詩集なり/題して — 恋愛至上 — と読めたり/噫……この  
人なりしか？/文学と酒杯と女と踊とを讚美し/花より花へ/春の香と蜜とを追ひ求むる  
蝶の如く/享樂と恋愛と肉の感情の……/駒を乗りまわして毒瓦斯を吐きしは！！/『君  
か、愛は死より強しと/若者の未だかたまらざる心臓へ/毒瓦斯を吹き込み悩殺したる  
は！/特に — 靈魂の詩 — をば/非文芸にして無価値と排斥したるは！/愚ものよ、悟  
らざりしか/真の詩は感情の所産にあらず/御方の心臓よりの波紋にして/御使等の琴に  
ひびき/宇宙永遠に靈波をあぐる事を！！/真の詩は『清福』に香るものぞ……。

灯火を持てる者/世の幾多の青年男女のことを想ふ。/ — 人独り居るはよからず/二人  
一体となるべし — /天地創造の夜明に/祝福して定め給ひし/ — 異性への道 — この  
愛や深し/わが骨の骨、わが肉の肉/神によれる聖なる結合/人これを離すべからざるな  
り/こは最も心して詩ふべき事ならずや！！

世の人よ、青年よ/真の恋愛をなせ！！/永遠の生命の上に立ちて/相互に確く手を握れ  
よ……。/世の人よ、青年よ

恋愛を汚さざれ/神聖なる生命の培ひ/己の深さに於て結び合へ……。

われは祈りつゝ彼を離れ／此処の中心と想ふ処に向つて進みたり。／（第参章終り）

■「灯火を翳せる者」(7) 長田穂波（『清流』第15号、1943年9月10日）

第四章 冥府は深し

灯火を翳せる者／地獄について深く想ふ／＝地上の智慧の集積する処／されど此処には  
 ／聖智はいさゝかもなし＝／咀ひは充満すれども／祝福のこゑは絶えて無し／深き哉…  
 …暗黒の淵／激しき哉……罪の焰熱／＝火は消えず蛆つきず＝／後悔の渦、甲斐なく  
 騒ぐなり……。

行く程に／首に縄を巻き付け／腹部うち破れ／臟腑ことごとく流れ出で／己が腐臭の中に  
 くずをれし男あり／『君は何人にや／地にありし日を語り給へ／われ問へど、彼は答へず  
 ／灯火を恥ぢ恐れて逃げゆかんとす／御使は、囁き給ふ／『イスカリオテのユダなり』と！

われ思はず彼に迫り

この愚者、この反逆児めツ

叫びつゝ幾撃かを加えしが／又、抱きつきて大声に泣きたり／『噫、兄弟ユダよ／御方に  
 選ばれ／天にまであげられし者よ／何とて地獄にはおちたるか！／あゝ、汝あやまてり／  
 あゝ、汝あやまてり／＝太陽を地上に縛<sup>つな</sup>ぎ得んや＝／『太陽は空の光りなり／その恵  
 みに於て地に降り／よし地平線下に没するとも／天と地とは遥かならずや……／御方は  
 十字架に登らざるを得ず／御業を拒み得んや／神を己が理想の奴隷となし／己が腹の利慾  
 を充さんと為す／これ、世の迷信宗教にして／＝サタンの備えし畏ならずや＝

『全世界の富にまさる生命と／永遠の御国の光栄とを／銀三十……何と言ふねづもりぞ！  
 ／噫、神を安値に売る／汝の子孫いまに尽きず／＝赦罪符＝は即ちこれなり／兄弟ユ  
 ダよ／汝ルツターの祈を知るや！！／現世に汝を責むる資格者いくばく？／斯くてわれユ  
 ダの首を抱き／深く深く悲しみ泣きつゞけたり…。／ユダに別れてより／わが心、甚だ重

くなりぬ／＝天使もし地獄に落つる事あらむか

何と言ふ矛盾／何と言ふ悲劇／実にサタンとは是れか＝

地獄とは／自らの髓より搾れる／油の燃ゆる池にして／自らを焼滅しつゝある処ならずや  
／神の弟子宗教家のために祈るなり…。

御使の前に伏して乞ふ／噫…地上の人、誰か聖前に立つを得ん／御憐みなくば人みな亡び  
ん／いま我心、この人々のために痛む／＝これらのために祈るはよきか＝／御使、わ  
れを制して／汝、これらのために泣くか！

愛の心や、うるはしきかな

＝されど御審判は全きなり＝／＝審判の後には涙なし＝／重ねて告げたり斯言を  
記憶せよ……。／御使は、わが涙を視て／面をくもらして更に訓え給ふ

地獄も又愛の御旨にあり／曾ては友と呼び給ひし／創造は愛の御業なれば！／光の  
子が暗となり／自主の子が奴隷となる／これ神の愛と恵にそむけるなり／愛に逆ふ  
者は砕けん

＝愛なくば地獄なし＝／愛は義にして義は又愛ならずや……。

イスカリオテのユダに逢ひて後は／苦悩の深刻なる／冥府の腹に留るに耐え得ざれば／  
『噫、冥府はダンテの夢にもまさりて／火と蛆と悩みと悔との深淵なれば／未だ訪ね度き  
屍もありつれど／御使よ、われ忍び難し／此処を去らまほしと思ふなり』／さて行く程に  
路傍に彫像の如き者立つ／＝ロトの妻を視よ＝とあり／此処は地獄に程近き外郭なり  
……。

『ああ、御使ひよ／ロトの妻の背後に／幾千とも知れぬ塩の柱の／一連に続立するは何者  
らぞや／これ世に於て信者と言ひし／或者達に非ざりしか？／悲しき哉、主に導き出され  
／御国への旅にのぼりながらも／心世の慾に引き返され／エジプトの肉鍋を慕へる者は／  
何時の代にも尽きざるか……？！



我れ泣き悲しみつゝ進めるに／御使また立ちとゞまりたり。

冬枯れの野に臥す者／蝗虫に喰はれし株根／煙りくすぼれる麻なり  
 斯く記されてありたり。／われ注視するに／多くの＝眠れる屍魂＝あり／御使の言に  
 したがひ／われ屍魂に親しく触れしに／＝未だ皆、内にぬくみあり＝

灯火を持てる者／よろこびて歌へり

あゝよろこばしき哉／＝これら皆、甦らん＝／芽は枯れたり／されど根はいき  
 づける／春きたりなば／甦がへらなん／復活の主よ速くきませ／この兄姉のために  
 ／御約束を持ちてきませや……。

御使は訓へ給へ／この者らは或時はサタンを倒せるなり／然るに、其後、信仰の火をおと  
 し／世の塩、光、の忠実を失ひ／＝なまぬるき＝もの共なりし。／中には己れ一個の  
 救ひをもて／満足して、生命を土に埋めし者なり。／＝傷める芦＝／＝煙れる麻  
 ＝／主の日の御審判を受くるまで／＝永く眠りて待つなり＝アーメン

## 2.

われ此処にて又してもユダを哀れむ／＝彼は既に審かれたり＝／涙を禁じられし処に  
 は希望はあらじ／さるにても、この眠れる者の内に／＝ユダの如き自殺者を発見したり  
 ＝／御使よ……！／われ問ふ事あり訓え給へ／＝自殺＝は／御方より賜りし生命を  
 破り／人としての使命を放棄し／責任を回避する罪惡にあらざるか？

御使は進みて自殺者の上に手を<sup>お</sup>按き／『汝の此処に参りし路を語れ』／斯く命じ給へば彼  
 は独語し初めたり。

わが住む里は／川の清きに影を映し／小鳥啼く山の麓にありて／人も業も天国のご  
 とくなりし！／貧しくとも飢うる憂なく／病むことも、まれにして／<sup>わらひ</sup>喜笑のこゑ軒  
 毎に溢れ／和らぎ睦みて一家の如くなりし

噫……彼の反逆の子等が／黒頭布をかむり来て／持てる者と持たぬ者とを／分争  
せしめし時に／川は濁り、山は枯れ／酒と賭博は青年を捕え／分産と発狂と乞食は  
多くなれり／われ愛郷のために泣き／力の限りを尽したれども／改めんと為す者  
なければ／＝ 生命を捧げて ＝ 祈りたり

御使いよ／彼の尊き死の後は如何なりしや／御使ひ他の一人に手を按き／汝の此処に来る  
迄の路を語れと命じぬ

わが住む郷は山ふところ／清き流れを掬みで飲む処／されど人心すさびて／争ひと  
呪の中に包まれたり／〇〇は愛村の涙に／祈りつゝ身を捧げつくしたり／噫……い  
かに尊き死なりし事よ

天に祈りつゝ捧げし屍を／葬りし日のその夜なりし／村の若者らは起ちて誓へ  
り／＝ われらも彼の路をゆかん ＝／嘲笑ふ者は村を離れゆき／残れる者は更正  
したり／荒れたる畑は鋤を入れられ／枯れたる山は、わかやぎたり／われ村畑を守  
る夜／俄の出水防がんとして／身もて防ぎ止めたり。

御使よ、彼らキリストを知れりや／＝ 否、キリストを知らざりし ＝／我れ深く想へり  
／彼らの路は各々異なりて死にたり／然れど＝ 祈は一つなりし ＝／彼らは皆『贖罪的  
犠牲愛』に倒れたり／自殺は罪か……然り罪なり！／但し贖罪的犠牲は断じて罪にあら  
ず！／されど救主の御名を信ぜざる者は／その一事の他の罪は残れり／＝ 審判は未だ残  
れるなり ＝ アメン

灯火を翳せる者／＝ 灯火を振りまはし ＝／広く遠く視わたしたるに／『信仰者、聖者  
等の肉体も眠り居る』／主は信ずる時に／信ずる者の内に新しき生命を賜ふ／これ神への  
子心なり／斯くて罪人を新しく活かしめ給ふ／＝ 最大の奇蹟なり ＝／終り迄、耐え忍

びて主と偕に／神の子の路に立ちし者は御国にふさはし

是らの＝永眠者の群＝の／呼びさまさるゝ日／これらの聖徒の肉体も聖化されむ！／  
 オーキリストに在りて肉体に希望あり／その日、その時まで／衣服部屋の衣服の如く／安  
 らかに憩へかし／汝の生命は既にラザロと偕に／聖なる御国にて歓びあるべし……！／オ  
 ー永眠者よ／希望の内に静かに安らかにあれ！！

御使よ／われいま一つの事を知れり／否、二ツ、三ツの事を知れり／人の地上の路につゞ  
 きて／＝死＝永眠＝昇天＝／この三つの路、永く続けるを！

死は冥府なり地獄なり。／永眠には希望の日あり。／昇天は聖約の子となる。

この奥義は聖書の内にあり／目ある者は見て悟るべきなり……。

芥種一粒ほどの『義』をも／（義とは何かを想へよ）／見おとし給ふことなし……。

その心、義を慕ひ／熱心に求めたれども／真の義に達し得せず／世を去れる魂の悲  
 しみを／主は、こゝに置かれたり／彼ら『主の日』に甦り／真の義、羔を拝し／歓  
 び、信じ、崇め詩ふか？

歌、起きよ、夜明だ暁明だ

希望の星はキラメクよ／目ざして来たる山頂に！／晴れたる空にそゞり立つ／絶頂  
 われに迫りきぬ／心もおどる血もたぎる！／愛に破れし傷あとも／義に倒れたる疲  
 れをも／光り仰ぎていまいえぬ！／信ずべき哉、ハレルヤ／頌むべき哉、アーメン  
 ／カルバリ山に栄えあれ！！

幸福なる哉、義に飢え渴く者／天国はその人のものなればなり。／幸福なる哉、心の清き  
 もの／その人は神を視るべければなり。／この人々は、／その為め迫害されつゝ／忍びて  
 世を去りし人なればなり。／人にあやまられ／世にいれられず／泣きぬれ、悲しみぬ、他  
 のために！／＝されど御方は知り給ふなり＝

たゞしき木は生ひ立ちたり／されど『義の太陽』を知らざりし／果実は形なりたれど／力  
はつかず味はつかざりしなり／＝ 噫、キリストの血に／浴したる者は幸福なる哉 ＝／  
この者のみこそ！／＝ 神の子達 ＝ ととなえられん／永遠より……永遠にわたりて／  
たゞ一度び、恩寵の柱をば／地上に建て給へる摂理なれば……。／（つゞく）

■「灯火を翳せる者」(8) 長田穂波（『清流』第16号、1943年11月15日）

第四章 冥府は深し（つゞき）

3.

灯火を持てる者／目を張りて歩みつゝ夢をみたり／第一の夢はこれなりき／或る嚴重なる  
獄窓の中／うすくらきすみに／しはくちやの古着の如く／獄死した年老ひし婦を見たり。  
／嘗つては水を汲みし事あり／彼女の汲みし水には／辛勞の汗の玉を浮かべゐたり／淋し  
き心の影も射しゐたり……。

彼女の汲みし水は谷の水／木の根、岩角にてコナレシ水なり。／人々はザブザブと／家具  
も洗ふ……おむつも洗ふ／牛馬に飲まし、小鳥も飼ふ／草にもかける、花も生ける／＝ し  
かし彼女は寂しかった＝／私は、いつまで孤独で居るのか？／私に家庭の爐はないの  
か？／母と這ひ寄る子はないのか？／淋しい年は過ぎて行くなり……。

彼女は三十余り四十近く／その年の春、家庭を得たのである。／膝に這ひ寄る子は二人／  
夫の病ひ長くして／貧しき灯、まもる身の／＝ 夫への愛、子への情 ＝／パン一片を盗  
みたり。／悔ひしも遅し獄窓の／まくらき夜に夫よ子よ／子よ、夫よ、とて泣きながら／  
心のこして逝きしなり……。

第二の夢はこれなりき！／玉のうてなに美しき／花の如くに世をさりて／うから、やから  
におしまれて／葬<sup>とむ</sup>らはれゐる婦あり。／嘗ては主にその全部を献げ／法鐘ひびく山庵に／

行ひすみし尼僧なりし／彼女の潔き姿より／彼女の愛のほどこしに／人の心は潔められ天  
使なりと呼ばれたり

清き流れに立つ波も／はじらひ沈むばかりにぞ／うつる尼僧の水鏡／＝ふと胸騒ぎおぼ  
えたり＝／はたちばかりの若き血は！／時も時なり、おりもおり／つゝしみ深き若殿が  
／神詣でとて、庵訪ひて／礼儀たゞしく帰りしが／たゞ交したる数言の／美しくしき声は滲  
み着きぬ……。

五度び若殿の庵訪ひし日／彼女は尼の世を捨て／花嫁姿……駕でゆきけり。／さても彼女  
のその後は／夫の愛と世の幸に／酔へる時間は華笑しぬ／されど心のさむる夜は／＝神  
への愛に悔ひて泣く＝／痛む心に耐えかねて／夜半のしづまを蹴破ぶりて／皆踊れ、酒  
だ酒だと叫びたりけり。

つかへめ達の呆然と／あきれ果つ程、華やかに／浮かれ遊ぶと見る内に／俄に人を退ぞけ  
て／＝加はる強き悔に泣くなり＝／綺羅を飾りて行列に／主人となりてゆくときに／  
街に迷ふ＝乞食＝をば／己が乗車に引上げて／いたわる様に涙あり／＝慈悲夫人ぞ  
と人は呼ぶなり＝

彼は日も夜も闘ひの／中にもまれて有りながら／右に全く組し得ず／左にも全く結び得ず  
／心の情と……身の情と／二兎を追ひつゝ逝きにけり。／山庵しづかせ、ラげる／水にう  
つりし花はかれぬ／国主の園に香りたる／名花一輪、地に散りぬ／尼僧と花嫁、いずれが  
真か偽りか…。

第三の夢はこれなりき！／こゝ高原に羊飼ふ歌なごやかに／夕陽せまる峰ちかう／澄める  
風しづかにわたる……。

さらにし人な偲ぶれば／身ははかなくも空蟬の／もぬけの皮となりつれど／霊は

天国へ昇りゆき／御神の幸にあふれなん。

若者、わが聖徒は逝きぬと／＝悲しき祝福の葬ひ過ぎたり＝

高原の花に座して／羊の夢を守りつゝ恋を語る／若き男女の牧羊者ありき／彼ら現世の嵐を未だ知らず／純白、晒布の如き心の所有者なりし／＝或る夏＝／都会の華美の代表の如き／男女の群、嵐の如く現れたり／空気は腐り、花は踏み砕かれ／高原の恋は紅塵の底に引入れられぬ／＝失恋の青年はのこされたり＝

そこでね／君の失恋を信仰の淵に／思ひ切つて投げすてよ／そしてね／君は神の愛と結婚するんだ／可愛相に／彼女は悔ひに泣きて／哀な姿を此高原に現すであらう！

彼は＝宗教にかくれた＝／彼は全く言行ともに潔く／＝高原の聖者＝と呼ばれたり。

彼は『心の燃ゆる呪の火』を／消さむ為めに尽した／凡ての言行も、修養も／＝己が心の火にうちかけた＝／彼の宗教の主人はこの火であつた／彼れもこれを信仰と信じ／他人も尊敬を払ふておしまなかつた／教会も＝高德なり＝とした／噫……彼れ青年は逝けり／手向の花と咲ききそう／高原の見晴したかく墓たてり……。

愛と情けの燃ゆる火の／そこに人世のいつはらぬ／＝誠実＝の花のなからめや！／若き血汐のたぎる夕／そこに真紅にかほり立つ／＝恋＝の純情なからめや！／『人の心に燃ゆる火』は／生命の父へ帰りゆく／<sup>しおり</sup>葉の花でなからめや！／わが夢は、さめたり／心は重し、瞑想は深し歩みつゝ……。

#### 4.

御使は言ふ／『人の真は何が故に存在するか？／嬰兒を抱く母の涙たふとからざるや／その母のふところより／嬰兒をうばう事あらば／＝聖手を無情と呪ふかや＝／人の生れ

る、その事は／深き聖旨のあるところ／＝御神のために凡ていで＝／＝御旨を為さん、そがために＝／人の心に火を備へ給ふなり……。

汝……知らむ！／山里のむら／静かなる朝／娘らの水汲む歌／いと朗らなり……。／暮れ迫る野／残光もゆる中／牧童の草笛／哀調にひゞけり……。／神の祝福の丘／ベツレヘムの邑なりし！！

或日のことよ／俄然起りしその叫び／父母兄弟らは狂ひつゝ／嬰兒が、幼子がと……。／ヘロデの軍のさりしあと／家に……街に／まき散らされしは／おさなき血染の屍なりしぞ……。／邑のなげきは高鳴りて／遠くラマまできこゑしと／予言はなりぬ、その如く……。

汝なにゆゑ＝斯くなすと＝／誰か御神を訴へ得ん／大権能の定めたる／＝摂理を誰かこばみ得ん＝

神を畏れ／その聖言を守る／これ人の本分なり。／人の神の子たる性能に／備への欠げたること／果してありや……否や／人の世の事、神知り給はずや…。

灯火を持てる者／足を止めて問ふ／彼のベツレヘムの嬰兒惨殺を／御方は何故にゆるし給ひしや／地上に於て大なる疑問なれば』／御使、いと厳肅に

贖ひの業は／犠牲なくて行はれじ／大なる生命の誕生は／その母の陣痛も又大なり  
／母なる地ベツレヘムは／光栄の苦痛をなめたり／全人類の救ひ／聖業の『最初の殉教死』／汚れなき血は流されたり。／噫……光栄の苦痛にあづかる者／何たる幸福ぞや／救主の負ふべき／神の子の十字架を／共に負ひ立つなり

主と共に血を流す者／主とひとしき光栄を受くべし……。

ベツレヘムに／彼の日、胸さゝれし人達／父……母……兄、姉／隣人……旅客、みな報はれたり／＝天に於て報ひ多きなり＝／斯く歌ひつゝ、想をすて／進みゆく程に冥府や

過ぎたりけん／明るき処に出でたり／冥府は地の事を学ぶによし／されど長く留るに耐え  
がたし／いまは解放されし清<sup>すが</sup>しさを覚ゆ……。

我れ思ふに／人は、己が志す処の成れるを知る／されど其の事が如何に摂理と／関連し  
つゝあるやを知らざるなり

おのが投げし小石の／つくれる波紋を見るも／その波紋をつくれる／水の心の動き  
は計り得じ／見ゆる波紋は／しばしにして消ゆれど／水の心にその跡は残るなり。

我れ思ふに／人は生きむ事を欲するも／生命の本質は知らざるなり／日毎の生活が生命の  
上に／如何に関係しつゝあるかを知らず。

土をつくり／肥料により／同じ苗と萌えながら／色にあらはれ／花にあらはる  
／生命うちに化せらるゝなり。

人の世の凡ては【次頁下段へ】／【前頁ヨリツゞキ】／摂理の内に吸収される／汝の今日  
の信念、志望より出る行為／それが土となり肥料となる／されば＝汝の生活＝は／汝  
の葉であり花となるのである／汝の生命の色は／そこに造られつゝあるを知るや／生命…  
…生命……生命／噫……生命の神秘なる輝き／そこに羔の血は与へらるゝなり……。(第  
四章終)

■「灯火を翳せる者」(9) 長田徳波 (『清流』第17号、1944年1月1日)

第五章 みくに

幾度び触れても／奇であり、不可能であり／神秘の極みなるは／＝透明なる壁＝なる  
／＝摂理の網＝なりけり。／小鳥の前に張りめぐらされし／『霞網』のごとく／凡て  
のもの身近くあれど悟らず。／魚をかこめる網のごとく／予定のまゝに引寄せらるゝも／  
凡てのもの是を知らざるなり……。



この幕は生きてあり／義しき性能を有して／＝使命に忠誠なり＝／われ、こゝに帰り  
来り／通過なさむと一礼なせば／壁は火と燃えて我を包み／焰は口より入りて腹を貫きた  
り／こは瞬間の出来ごとにして／＝われ全く潔まれり＝／地獄に入りし天使も／その  
都度、斯く潔めらるゝなり。

透明の焰を通過したる／わが、すがしきよ／明朗に歓悦に軽快に／白衣は御恵の芳香を発  
散し／槍は全勝の勇氣に充ち／灯火は煌々と燃え輝きて／わが全身は勇み羽ばたくなり。  
／第二の天はこゝにつき／第三の天、眼前に拡まれり／いまぞ来れり……噫きたりたり／  
天津御国、わが国籍の在る処……。

第三の天は／これ土の国か霊の国か？／肉のものに土の国あり／霊のものに又ふさはしき  
国あり／わが視るところ／＝地と異なりて地に似たり＝／神の創造は御国に似せ給へ  
るか！／未だ穢れ知らざりし／彼のエデンの園も斯くありしか／われ初めて見る心地せず  
親しみあり。

山あり……河あり／山は緑にしたゝり／河底に金砂銀砂あり／小鳥はきそひ歌ひ／魚は隊  
を作りて遊ぶなり。／曠き野あり……里あり／花は香り、果樹は実のり／人はその下に楽  
しみ住めり。／特に生命の樹は至る処に茂り／その葉は薬にして／その露は香水なり／そ  
の実は絶えず熟して／人みなこれを食して養はるゝなり。

風は和らかにして清しく／こゝに涙なく、憂ひなし／こゝに病ひなく、死もなし／こゝは  
老ひる事なく若々し／人は皆、異体同心／＝羔の血に生れし兄弟姉妹なり＝／その言  
語は愛の親しみに満ち／＝発音も綴りも地上と異なり＝／未だ聞きし事なし然れど悟  
り得たり／みな歓喜と悦楽に踊りつゝ／＝忠実に使命を励むなり＝。

獅子と小山羊と共に臥し／幼児は毒蛇の洞に戯れ／小鳥は鷲とねぐらを同じくす／

ここには争ひなく／あえて害せらるゝ事なし。

中央に大神殿あり、これ都なり／＝紫雲にて包まれたり＝／都より四方に大路小路は  
通じ／石垣はめぐり立ちて門多くあり／われ都の外側を一巡なしたるに／その有様、たと  
えんすべもなし……。

石垣は七色の球にて包まれ／その色は、その徳に輝くなり。／正門は高くしてひろく／扉  
はあれど常に開かれてあり／＝荘厳なる哉＝／正門に通ずる路は最大にして／坦々と  
のびて限りを知らず……。／都の内は栄光に充ち／聖座は光雲の上に浮き出で／その右に  
キリストは座し給へり。／御使と我とひれ伏して拝したり……。

＝御前へ、御前へ、御前へ＝／童子の声に应じて／我ら三度び膝行したり／わが救主  
は聖座を立ち給ひ／御手を伸べ我が頭に按き給ひて／＝『勝ちを詩へよ』＝／柔和な  
る聖声にて祝福を賜ひたり／われ光栄に恍惚となり／たゞ酔へる如くにて伏しゐたり。／  
何と申上べきか！ われ知らず／感激の涙とゞめあえざりき……。

幾その時かの後／われ頭をあげて拝し奉れば／聖顔は栄威に輝き／御手に全宇宙の政事を  
掌り給ひ／権威と審判とを命じたまふ……。／御前の左右に聖者達みながれ／御後に天使  
達は並び立てり／聖者同音に『聖なる哉』と拝すれば／天使も又『聖なる哉』と唱和す／  
この時、われは燃えて／＝御贖主に栄えあれ＝と叫びたり

この時、大合唱はおこれり

世の罪のため／十字架を負ひ／冥府にくだり／甦りて勝ち給へる／神の羔にみさか  
えあれ、アメン／審判の権は／御掌にあり／御恵の祝福も／又御手にあり／神の羔  
にみさかえあれ、アメン

われ三度び伏して拝し／御前を退き……都の内をめぐれり／われ、詩魂を励ましたるも／

御都の風光いかに写し得べきか／ペンをなげ出して、仰ぐのみ！？／イザヤの口も未だし  
 ／ヨハネの黙示も未だし／ダンテの曲も遠し／＝人はたして詩ひ得るか？＝／人間の  
 感覚の未だ知らざる善美／地上の言語に余るものゝみなり……。

ただ尊しや、みくに！／ただ慕はし、みくに！／ただなつかしき、みくに！／聖なる哉…  
 …みくに！／妙なる哉……みくに！／楽しき哉……みくに！／輝ける、みくに！／香れる、  
 みくに！／清<sup>すが</sup>しき、みくに！／噫、みくに、噫、みくになる哉。

## 2.

御国には／御稜威の栄光／無限の御聖徳に輝き／日月を超過して／朝あれども夜の暗なく  
 ／昼にも一点の蔭もなし／こゝに地上に於ける太陽はなし／聖座は＝義と愛とに照り輝  
 く＝／常春の心地よさよ／われ切に希ひて／久遠に住ましめ給へと祈りたり……。

噫、なつかしき哉、御国！／地上の感覚の未だ知らざる処／住む者、みな御使の如し／然  
 れど、われ悟れる事あり／＝御国には階級あり＝／＝聖徒には使命あり＝／君臣  
 の道あり／父子の情あり／長幼の序あり／皆、愛の徳に治まるなり／御国は温情こまやか  
 にして乱れなし。

視よ！／大空に、彼の星の栄と、此星の栄あり／彼の星に、此星に各々使命あり／されど  
 無数の星々／整然と秩序を保つならずや／これ御方の＝義しき聖旨なり＝／希くば我  
 も又祈る／彼の靈感詩人たりし／ダビデ王の心のもとめ／切なる憧憬！／＝御国の門守  
 たらしめ給へと＝

聖なる都エルサレム／去りがたき心に振り返れば／大門は荘厳にそびえ／石垣は麗美に輝  
 くなり。／都の空、輝く雲におほはれ／御徳の香り八方に散布さるゝなり。／こゝに通ず  
 る大路、小路／星々へと伸びて／御使達、飛び去り飛び帰る／そのさま蜜蜂のその巣に通  
 ふに似たり／御国のつとめは静かにして速し……。

視よ遥より『エリヤの車』来る見ゆ！／御使よ、彼の車は何処より／何人を迎え来れるや

『地上にて聖戦に耐え／勝を得し勇士なる／汝の兄弟、汝の姉妹／迎えられて凱旋  
したるなり』

聴け……歓迎の歌、勝利の曲は／都の内より高く奏ぜられ／潮の如く合唱は湧き起りたり。  
／車は肅々として都に入りたり……。

信仰の娘、羔の花嫁は／いま栄光の床に登りたり／彼女らは／迫害の血と祈の香と  
／忠誠の服を着飾りて来る／貞潔に座し／この日この時を憧憬れ／彼は常に歌ひ  
つゞけたり。

斯く我は歌ひつゞ／われを忘れて舞ひ祝へば／御使も又ともに舞ひ歌ひたり……。

われ又、悟る処ありたり／＝信仰とは／主の贖罪を歓受し／神の愛に感激して／ひたす  
ら神を愛するにあり＝／その生命も、幸福も、天国も／凡てを神に捧げ尽して／神に仕  
ふる事を希ふ者なるべし／神より受くる酒杯ならば／十字架なりと地獄など／聖旨のまゝ  
に飲み干さん哉……。

灯火を翳せる者／われ又……幻を見たり。／或る男、神を知りてより／御救ひを歎び愛に  
燃えたり／＝天父の御栄えをこそ顕さめ＝／されど彼は性来そゝつかしく／毎日あや  
またざる事なし／夕べごとに彼は悔いて泣きつゞ祈る／『われは罪人の首なり赦し給へ／  
欲する善をなさず／欲せざる悪を為すなり、噫……』

然るに彼男に瓜二つの男ありて／彼のあやまちを一つ一つつぐない

／毎日、彼と偕に歩めるを見る／夜ごと悔いて泣く時／その涙を潔めて天に運ぶなり／そ  
の手、その足に血はしたゝる／彼の男と……この男と／二人にして一人なるか？／一人に  
して二人なるか？／彼男、御国に帰る時／＝贖れたる信仰者よと迎へられぬ＝

われ又、異なる幻を見たり／或る娘ありて聖母に仕へゐたり／彼は村の若者を愛して行けり／然るに後の庵に彼女と同じ娘ありて／祈り……施物し……病人を慰むるなり／人々は言ふ＝ 彼娘なり ＝ とぞ！／彼女は若者により母となりしが／年老ひて死別の孤独となり／聖母の庵に帰り来りぬ／視よ庵の内には／たゞ輝ける十字架のみ建ちてありき……。

われ又、一つの幻に泣きたり／不治の病床に倒れ伏す者ありき／彼は御救ひを歎び神を愛す／＝ 御栄光に奉仕こそなしたけれ／されど立ちあはざる無念さよ／主よゆるし給へ、あはれみ給へ＝／斯くて泣きつゝ多くの事を祈るなり。／視よ、彼なりと諸方に働く者ありて／その功德を……たゞえるなり／彼は其声に奇異の目をあぐれば／＝ 我れ汝にかはりて行へりと＝。／この時、御使は言ふ

汝、何を見たるや！／汝、活ける贖主を見たるなり／主は聖座の右に在し給ふ／されど愛の聖霊は／いまなほ地上に於て働くなり／主の贖罪の聖業は／その忠実なる選ばれし者により／十字架にのぼり給ひつゝあり／主は昨日も今日も／救はる者の贖ひをなし給ふ！！

われ感激し、恐懼し、歓喜し／心をそゞぎ出して頌讚したり

神、エホバよ／汝はむかしも、いまも／とこしへ迄も／活ける神なり／十字架を負ひて／救ひ給ふ愛の神なり／『信じ受くる者は幸ひなり』／その富と徳とは／神のみくらより来ればなり。／（つゞく）

#### ◇「大なる暗示」

昭和二十二年／クリスマス祝会感話／大なる暗示

本文は二十五日の日曜学校合同クリスマス礼拝の為プログラムと共に用意せられてあつたもの、死後見出され当日石本が代読した。

会員及日曜学校の皆さん／クリスマス、御芽出度ふ！！！！

◎さて皆さん、全智全能にみまして天地万物を御創造になられた真の神様に何か出来ない事がありますか？——否、神に出来ない事など絶対にありません！

◎それでは何故にその御独子をば地上に降し給ふのに美しい御殿か偉い学者の家か大金持かの家庭にお生れなさせなかつたのでせう。

◎それイエス、キリストは貧乏大工の子としてしかも馬小屋で御生れなさいましたでせう！そしておしまひに十字架に釘けられました。こんな惨な人の誕生を祝ふなんてどうした事では？／何か神さまは間違たのでないでせうか？何だか不思議ですね……。

◎然し決して神さまに間違はありません。寧ろ私共が不思議と思ふ処にこそ神の深き御心があるのです。これは信ずべき大切な点ですよ。如何なる場合にも神を義とする事こそ真実に神を知る者の信仰態度と言ふものです。

◎それでは神はその独子を何故馬小屋に生れしめたのか。大きな問題ですね！

◎世の人は誰一人として他人より自分だけが甘くなろうと慾張らぬ者は無いのです。そこに嘘がある。そこに嫉みがある。そこに呪ひがある。そこに高慢がある——そして国は国を征め、民は民と争ひ、戦争のやうな大きな事から兄弟喧嘩の如きものがあるのです。

◎王さまの御殿も学者の家も富者の家庭も罪罪罪で一杯です、汚れ切つてゐるのです。人間らしくなくなり動物より劣る有様です。この誠に浅間しい馬小屋の如き穢れた世界へ神の子は降り給ふた。そしてこの世を潔めて人類を神の子とし、地球の上を神の国となさるためにお生れになりました。

◎この神の子の尊い謙遜と深い愛の御潔めを信ずる者は救はれ、神の子とせられます。この救はれし神の子達によつてのみ家庭にも、社会にも、国家にも、世界にも本当に義しき平和が来るのであります。だから不信仰な人のある限り人間の世界に不幸な事は絶へません。

◎併したとへ馬小屋のやうな処に居ても神の子は矢張り尊いので、上は王様のやうな博士から下は卑しい牧羊者までが拜みに参りましたでせう。／そのやうに私共も基督を信じ救はれて神の子とせられてはよし一生涯病気で癩園に居つても決して悲観すべきではありません。

◎たゞ大切な事は、神の子とせられた私共はどんな時にも神の子としてイエス様の如く暮さねばなりませんよ一たとひ十字架に釘けられてもです。

◎ではイエス様はどんな御暮しをなされたでせう？種々の事をなさいましたが一口に申しますと人に頼らず、世を恐れずたゞ神の御心に従はれました。

◎その如く神の子は皆、人から何と批評せられても、他から如何に扱はれても、徹底的に神の御心に従つて、人を愛し世を潔め、義しく清く、地上に神の国の光栄を現すために全生命を賭けて暮すべきであります。是をこそ神の子と言ふのであります。

◎どうです、一寸難しいと思はれませう。確かに人間には出来難い事です。然し人間に出来ぬ業を神さまは可能です。そして罪を悔改めて基督を信じ救はれし人には何でも出来る神の能力、即ち聖霊を心の内に与へられます。神の御力によつてさせて下さるのです。

◎思ふ事も、言ふ事も、行ふ事も神の能力で活される、これを新生と言ふのです。新生とは新しい誕生と言ふ意味で、動物の様な罪に穢れた人間が全く新しく神の子となる一大変化のことであります。／私はいつも「地上に神の国の光栄を現すために全生命を賭けて生きる人が基督者だ。」と申します。これが即ち新人ですね。

◎さてクリスマスはイエス様の地上御降誕を感謝すると共に新しく神の子がたくさんに生まれ、義と愛との神の国の幸福に包まれ家庭も社会も世界も皆仲の良い兄弟として相愛互助の平和境となる約束の現れであるから全人類尽くの感謝し、歡んでお祝する日であります。

◎特に愛する日本は敗戦によつて、古い不信仰な国家は破れ果てました。今は新しい建てかへねばならぬ時でせう。さて然らば何処へ建てますか？元の古い不信仰の上に建てると又ひどい事破れますよ。／今度は全く新生して基督の巖の上に建てねばなりません。其の為には先づ私共が神の子になる事が先決である事を今日のクリスマスに深く考へませう。